

ぶどうの木

第 23 号



基督伝道隊

八幡前田教会
大濠公園教会
戸畑教会

目

次

巻頭言	榎本利三郎	1	心の風景(その二)	山中 良美	42
信仰告白	西山 公治	2	感謝	園田幸子(能美イチ)	53
信仰告白	正野のぞみ	4	米寿の感謝会に出席して	森田 清恵	54
キリストに出会うまで	郡 優吏佳	5	親子ローン	久保田宮子	55
カナダからの来信			祈りを聞きたもうものよ	「Y」	56
(カナダの旧姓 西原文江姉からのたより)		18	朝の情景	正野 悠子	58
カナダより	T・I	19	A Nameless View	My Little Friend	60
神様の栄光	統	20	敬老の日を迎えて	上野 米子	60
主のお導き	山羊っ子	27	黙想(雨)	上野 米子	61
水は深くなって、			新生児のための命名参考資料	伊規須太郎	62
越え得ないほどの川になった	津留崎浩行	32	あなたの声を聞かせなさい	大田 邦子	63
我が思い出(五)					
中国(旧満洲)編	鈴木 一幹	35			

巻 頭 言

榎 本 利 三 郎

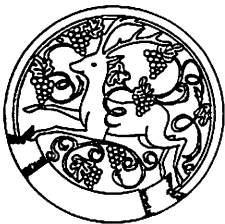
わたしは神である。今より後もわたしは主である。

わが手から救い出しうる者はない。わたしがおこなえば、だれが、これをとどめることができよう。

(イザヤ 四三・一三)

「わたしはぶどうの木。わたしの父は農夫である。」と仰せになる方は「全能なる神」です。今の季節が、場所が、……どんな状況であっても、ぶどうの木に実を豊かに実らせて下さいます。又一粒一粒慈味豊かな味を貯えて下さいます。今年も二三号の「ぶどうの木」の一粒一粒の果実を味わい、その豊かなめぐみを楽しませて頂きましょう。

一九九六年六月



信仰告白

西山 公治

私の蹟きは、自らを認められなかったこと。幼い頃から導かれ、聖書に接し、多くの兄弟姉妹をみてきた私であったが、多くの証しは理想となり、自分の在るべき姿を想い、現実の自分との間で葛藤となっていく。また、自らを裁くその考え方が、主イエス・キリストの十字架を否定していることを、聖書や教会での教えなどから知っていたため、なおさら、愚かさや罪の意識にさいなまれていく。これは生涯、克服していかななくてはいけない試練なのかも知れないが、陥っていたかたくなな心は、しかし二十代中頃のある頃から、聖言が与えられることにより、少しずつ変えられていく。

「主の道を備えよ、その道筋をまっすぐにせよ。」

突然、一方的に与えられ、聖言が与えられた事自体に驚き、感動した。信仰生活に変化を強いられ、また、洗礼を意識しだす切っ掛けとなった聖言。

「あなたは、冷たくもなく、熱くもない。むしろ、冷たいか熱

いかであってほしい。このように、熱くもなく、冷たくもなく、なまぬるので、あなたを口から吐き出そう。」

信仰に思い悩んではいるが、結局のところ、都合の良い、居心地の良い立場に自分を置いているのではないか、と迫られた聖言。もう一步踏み出すと、身動きがとれない程の大きな責任を負うことになりそうな気がして立ち止まっている。まるで、いつまでも独り立ちできず、大人になり切れない、情けない者のように自分が思えた。

「あなたの若い日に、あなたの造り主を覚えよ。」

私にとってであるが、この世的に恵まれた多くの状況にあつて、主を知り従う、

「すべての道で主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。」

という聖言と同時に与えられた。

「神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。」

聖書にあるとおりであるが、主から直接、実感として与えられ、父なる神の愛を知り、涙しそうにまでなった。恐れともいえる、固い、無機質的な神の印象を、温かみのある確かに実体のある

ものへと変えて下さった。これ以上何を求めるのかと自分に問うた程、感動させられた聖言。

このように、聖言により恵まれつつも、なお、かたくなに思い悩む時が続いた。自分には「聖霊を汚し、聖霊に逆う」ものがあるのではないのか、自分には、救いにあずかる資格が無いのではないかと考え、主が供に居られ、聖言が与えられる事実がそれらを打ち消す。

そして最近、私の歩みを一步進ませて下さる聖言が与えられた。

「さとい、わたしの来る時まで彼が生き残っていることを、わたしが望んだとしても、あなたにはなんの係わりがあるか。あなたは、わたしに従ってきなさい。」

在るべき姿などとは関係なく、今の私に「従ってきなさい」と言われる。これから先、与えられる道。それは、周囲や私自身の意に反するものかも知れない。しかし、主が導いて下さるのだから、「あなたは、わたしに従って来なさい」といわれるその道筋を、それることなく歩んで行きたい。

「患難は忍耐を生み出し、忍耐は錬達を生み出し、錬達は希望を生み出すことを、知っているからである。そして、希望は失

望に終ることはない。」

御心ならば、険しい道で思い悩み苦しめば良い。その度に聖言が与えられ、強められる事を知っているのだから。今さら踏み留まっている理由などまったく無い。ただ、与えられた道で主を認め、常に祈りをもって歩んでいきたい。

こうして主は、大きな躓きから私を助け起こして下さいました。しかしそれは、主の道の入り口にさしかかったにすぎないのだと、心して、祈っていきたいと思います。そして「私がきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」と言われたその罪人を、ここまで導き、変えて下さったことを、心から感謝します。

一九九六年四月



信仰告白

正野 のぞみ

私はクリスチャンファミリーに生まれ、幼少の頃より日曜学校に通っていました。

日曜日に何故、うちだけ教会に行くのか疑問でした。思春期の頃は、親に対する反抗心が強く、勉強も全くしない、学校にも行かない、不真面目な学生でした。でも、いつも、こんな事ではいけない、環境を変えなくてはと思い、親の目から逃れようと遠く離れた学校に進学しました。

学校時代、仲間と思い切り遊びました。楽しかったけれど、何故か心は満たされませんでした。毎年引越しをくり返し、とうとう実家に帰ってきました。昔の友人達は、すでに結婚し、子どものいる人もいました。その中の誰も、私の気持ちを分かってくれる人はいませんでした。仕事が以前より規則的になり、時間をもて余す生活になりました。すると、自分の心の方に目がゆき、自分はどうかしているのだらうと責め続けました。毎日が苦痛の連続で、眠れない日々が続きました。環境が悪い、あの人が悪いと、他のことに文句をつけ続けました。

この苦痛から逃げようと、今はやりの心が軽くなる生き方な

どの本を読み、カウンセリングの講習会にも出席しました。自分に強くなりたくいと切実に思い、本で読んだことや講習会で言われたことを実行しようと思いました。まるでダメでした。

しかし、だんだん本の中や講習会で言われることに一つの共通点があることに気づき嬉しくなりました。それは、聖書の聖言が言葉を変えて書かれているだけなのです。

そのことに気づかせて頂いたとき、主が私をずっと待っていて下さったと思いました。

こんなぶつぶつ文句の多い罪人を、神様はひとり子を十字架につけてまで救って下さった。今まで私は何て申し訳ない日々を送っていたのだろう。

これからは、神様に従っていく生涯を歩んでいきたいと思えます。

平成八年五月五日



キリストに出会うまで

郡 優吏佳

四歳の私は戸惑いました。幼稚園の先生が「神様、今日もお昼のお弁当を有り難うございます」というのを聞いて、ハテ、このお弁当は今朝お母さんが作ってくれたハズなのに——と。

私の家は仏壇あり、神棚あり、庭にはお稲荷さんまであるという家で育ちました。子供心なりに、「こういう神様に守られているんだ」と思っていたというか、「日本人なんだから、あつて当たり前のものがあるだけ」と思っていました。キリスト教のキの字も出てこない家でした。そんな私がキリスト教の幼稚園に入園した理由は、母曰く「近くまでバスが迎えにきていたから」なるほど。

そんな私が幼稚園でいろいろ神様のお話を聞いても、「そんなのウソだよ」と思って過ごした原因は、どうもあの「お昼のお弁当」だったような気がします。私は幼稚園が楽しい所と思つたことはありませんでした。先生に群がっていく友達が不思議でなりません。友達と遊んだ記憶もありません。先生から母は「お宅のお子さんは冷めています」という内容の話をされたそうです。幼稚園で私が得たものは、楽器の演奏、文字を

書くこと、そして絵を描くことだったような気がします。絵は母が幼稚園の放課後に行われる絵画教育に、特別な理由もなく入れたのが始まりでした。

小学校に入学しても、私は相変わらず冷めていました。そして、私はクラスの権力者的存在に常に相對する立場でした。団体行動が嫌いで、小学校の前半はろくな思い出がありません。絵とピアノがなかったら、どうなっていたことかわかりません。小学校の三年か四年ごろから、変化が起こり始めました。友達が出来、勉強もスポーツもうまくいくようになったのです。先生からも、いわゆる「良い子」として評価されることになんともなくわかっていました。しかし、そのころ同時に、今まで「人を嫌いだと思つても、口に出すべきではない。人を悪く言うものじゃない」と思っていた自分がどこかへ消えて、「あの人はムカツク。あの人は生意気。あの人は……」と次から次に、人に対する文句を友達にぶちまけている私になりました。私は自分が心の底から嫌っていた権力者にいつの間にかなっていました。しかし、その当時はそんなこと気にするハズはありません。他人の悪口で会話が成立するという、最悪の小学生でした。まわりからはちやほやされ、陰では本当にひどいことを平気でやっていました。

小学校五年と六年の時は、ミニ・バスケット・ボールのチー

ムに入り、バスケットに熱中して卒業、そして中学校入学。入学した時、小学校同様、全てがうまくいって、部活も勉強も頑張る自分を想像していました。三年後の高校入試も何となく意識していて、ヤル気で溢れていました。ところが、中一のクラスはヤル気を出して頑張ることが、馬鹿げているようにおもわれる雰囲気、流されやすい私は、いつしか一生懸命なんて馬鹿みたい、と思うようになりました。バスケットも三年生が引退し、二年生主体のチームになると、もう嫌で嫌でたまらなくなりました。年が一つしか違わないのに、どうして、と思うことばかりでした。服装についてあれこれ言われ、髪は黒いゴムで結べ、と言う緑のゴムで結んでいる先輩。私が試合にでることを生意気だと言う練習に出来ない先輩。もう全てが嫌でした。部活も休みがちになり、勉強する気にもならず、授業中はウォークマンと文庫本、マンガを読んで過ごしました。放課後は何をするわけもなく、ただボーッとしていました。早く家に帰ると、「部活はどうした」と母が訊ねてくるに違いない。いちいち言うのは面倒くさい、と思っていました。全てから逃げたい気分でした。成績も下がる一方でした。誰でもいいから、人と一緒になっていて、その時その時が楽しければそれで良かったのです。無気力のかたまりで、死にたいと思ってても死ねない自分が嫌でした。心のどこかで、単なる逃避だと分かっていたのです。だから死

んではダメだ。でも、生きていて何があるんだろう、と考えれば考えるほど、無気力になってしまいました。中学一年生の学年末考査は目も当てられぬほどの成績でした。このままではどこの高校も入れない、と思う反面、どうにでもなれ、と思っていました。しかし、この時初めて、父親に本気でひっぱたかれました。私の生活態度と成績が原因でした。親に対して初めてすまないと思いました。中学生になったところから、一人人として、大人として扱ってくれた親を裏切った気がして、どうしようもありませんでした。絶対に親を裏切らない、親に心配を掛けたくない、と本気で思いました。

そのころ、あるバンドの曲に影響を受けました。その曲の作詩・作曲をしている人物の生き方、考え方に感銘を受けたのです。『人生全て全力投球だ。一瞬一瞬全て輝いていべきだ』と。瞬間の美学、そして死への美学にひかれていました。輝きながらもくだけ散りたいと。そして、今の私は一体何をやっているんだろう。世の中にはこんなに一生懸命何かに打ち込んで、体を張って頑張っている人もいるのに、私は一体何をしているのだろう。こんなところでつぶれていいわけではない。それから、再び猛勉強を始めました。春休み、部活以外は外へ出ずに、一年分近くの勉強を十日程でかたづけました。もう一度やり直したい、その一心で生きていました。二年生に進級。私は変わっ

ていました。何をするにもあのバンドの作詩・作曲者（以下「Y」とする）の詞が頭の中を駆けめぐっていました。苦しくてもやり通す。気合を入れて生きる。当時の私にとっては心の支えでした。バスケット部を辞めて、陸上部に入りました。すぐにリレーメンバーに組み込まれ、毎日が充実していました。自分の居場所が出来たのです。苦しい練習も「Y」の詞で乗り切っていました。新しい友達もでき、ああ、自分はやり直せる、全てがやり直せるのだ、という喜びで一杯でした。しかし、どこかで何かに飢えている自分がいることにも気づいていました。常に虚しさを抱えていることに……。考えるのが怖かった。また、こういう気持ちは思春期の特徴という、世間一般の公式に当てはめ、こういうことで悩むのは今しかないのだ、と自分を納得させていました。それでも、納得がいかない。中学二年生のとき、私は心に浮かぶことをノートに書き留め始めました。詩であったり、単なる走り書きであったり。その頃、書いたもの一つに次の詩があります。

「飛び出したら そこは フワフワしていた

飛び出したら そこは 天国だった

飛び出した所は

イヤな場所なんか

イヤな事なんか

そんな物 あるわけない。

まさに楽園だった

でも ちがった

そこは巨大なゴミ捨て場……

自分を見失う瞬間

私はそこから飛び下りた

本当の天国

そんなモノ無いことにも

気がついて しまったけど」

中二の私の中一の自分を振り返って書いたものです。ダメな自分に気づいて、自分なりに正してみたものの、一体何故生きるのか分からない。人生は常に苦しくて、皆自分の生き甲斐を探して生きるんだ、と。どうせ死ぬんだから、何かに打ち込む人生がいい、と。でも、自分が何にうちこむ人生なのか、分かりませんでした。

「カワイソウって思ったとき

心のどこかで ザマアミロって思った

人を助けたくても

やっぱり自分がかわいかった。

無性に死にたいと思っても

ただ怖くてできなかった。

誰だって心の中は矛盾だらけ

今の苦しいこの思い

あんな奴にわかってたまるか!!

…でも本当はわかってほしい…

これが我が心に棲む

最大の矛盾」

もうドロドロになってどうにも仕方がなかったのです。人間の醜さ、汚さ、世を取り巻く様々な矛盾。それは私の醜さであり、汚さであり、矛盾でした。何をすることも一生懸命やっていますという顔をする自分に酔い、他人をとことん批判する自分。どんなに考えても悪いことなのに、「このくらいいいよね…」くらいにしか考えない自分。常に何かに怒り、反面、常に自己嫌悪。自分をコントロールするのは、ロック・ミュージックと「Y」の思想だけでした。私にとって、ロックはドラッグ（麻薬）のようなものでした。頭の中のいろんなことを溶かしてくれました。嫌なこと、苦しいこと、つらいこと、逃避の一部だったのです。安心できる心境が欲しかった。不安のかたまりの自

分を殺してしまいたかった。しかし、このドロドロと悩んでいる自分をどうにかして形にして残しておきたくて、詩を書きつけました。

特別に勉強に打ち込む訳でもなく、なんとはなしに安全圏だと言われていた高校に進学しました。入学すると五月病ならぬ、四月病にかかりました。こんなハズじゃなかった…の連発でした。高校が何なのか全くわかりません。勉強の意欲に燃えている訳でもない私には、「せっかく勉強して入った高校なのに」とも言うことができず、鬱々とした心で毎日過ごしていました。そのうちに美術部に入りました。小二から油絵を描いていた私は、スポーツを本気でやりたいとも思いませんでした。何となく美術部といった感じでした。顧問の先生は野球部と掛け持ちで、美術部の方は野放し状態。でも楽で良かった気がします。私にとって絵は趣味でした。進路のいわば伏線にすぎませんでした。当時の私は教育系の大学に行き、中学の教員になるのが夢でした。以前の自分と同じように、ドロドロ悩んでいる中学生に、何か助言をしてやれる教員に。どんな教科でもよかったのですが、美術か国語だったらなあ…と書いていました。しかし、それも漠然とした「夢」であり、はっきり「何がしたい」というものはありませんでした。そのころ、二年先輩のバンドをしている人に出会いました。その先輩の夢を追いつづ

ける姿に憧れ、自分も一生をかけて何かを追いつづけたと思うようになりました。すると、それまで趣味でしかなかった絵が、自分にとって大切かつ必要なものである気がして、美大進学を意識しはじめました。高二へ進級と共に、私は福岡美術研究所（フクビ）という予備校の夜間へ通いはじめました。初めのうちは、芸大・美大を意識していたのですが、浪人生をみて、私はしり込みしてしまいました。どうしてこの人達はこんなにまで絵に没頭しているのだろう。何だか妙な光景に思えて仕方ありませんでした。うわ、自分には無理だ…、そう思って私は芸大・美大ではなく、教育系大学の美術関係の学科にしようと思心しました。今、思えば高二なんだから、そんなに描けなくて当たり前なのですが、プライドからそうなったのか、とにかく私は福教大の推薦だけを考え、勉強に没頭しました。そして成績はかなりありましたが、常に私に付きまとっているのが、「だから何？」というどこか熱中しきれない思いでした。「成績が上位だから、それでなんだというのか」、ダメだ、これを考えるとキリがない…。そんな三年進級を目前にしたある日、私は福教大の資料を見に、進路指導室へ行きました。しかし、手にとっていた資料は武蔵野美大のものでした。ショックでした。なぜ、私は美大の資料を見ているんだろう。逃げている自分がまざまざと見えてきました。実技の絵よりも、学科で受験

するほうが楽だから、私は福教大を選んだんだということが、はっきり分かりました。また逃避の繰り返しなのか!! 絶対イヤだ、と。もう一度、始めからやり直しました。私は美大・芸大を目指すこと、そして、一生絵画表現することを決心しました。高三の私は、高校はそっちのけで、絵に没頭していました。しかし、中学からずっと続いている虚しさは消えません。そのうえ、今度は、この世は本当にこのまま続いていくのか、人間は一体どこへ向かって生きているのだろう、など。ますますドロドロな気持ちを抱えている私がいまいました。友達に幾度となくその話をもちかけてみました。彼女は私にその答えは全て聖書の中にあると言いました。私の家にも聖書はあったのですが、それは母が学生時代に使用していた教科書しかありません。え、聖書に答えが…? 私はとても驚きました。私にとって聖書は昔話というより、作り話でしかなかったのです。内容については、小学生のころ、母が「ものみの塔」の信者から買った、『わたしの聖書物語の本』という出版物を読んではいましたが、あくまで作り事しか思っていませんでした。聖書を知りたいと私は思いました。今までのドロドロした思いから開放されるかもしれない。私は彼女にいろいろ質問しました。彼女が「エホバの証人」であることは高一のころから知っていました。だからどうってことは別にありませんでした。何か確信を持って

生きている彼女にひかれるものを感じ、私も聖書の研究をした
いと思うようになったのです。彼女は、私に、もうすぐこの世
はハルマゲドンで滅ぼされ、神に選ばれた一四万四千人の人間
が、天でイエス・キリストと共に世界を統治すること、「エホ
バの証人」はハルマゲドンという大艱難を生き残り、この地上
でパラダイスを築くこと、このパラダイスでは死も老いもなく
人々は生き続けること、死んだ人もよみがえり、皆で平和に暮
らすこと、そして、これらのことは神（エホバ）の意志であり、
エホバの証人はそれを世界に告げ知らせていること、等等、初
めて聞くことに私は驚き、ショックを受けました。

エホバの証人以外は全て滅ぼされるというのです。もしこれ
が本当だったら、私は今絵なんか描いていいのだろうか。
本当に神が存在するなら、私も神の意志を行うべきではないか。
もう頭の中はぐちゃぐちゃでした。この世が、この生きている
瞬間が怖くて仕方ありません。しかし、多くの疑問もありま
した。「死」は眠っているような状態であるということや、年
をとらない若々しい肉体で、永遠に生き続けること。永遠に地
上で生きて何をするのかと、彼女に問えば、たった人生八十年
じゃ、やりたいことを全てできないじゃないの、との答えがか
えってくる。はたしてそうなのだろうか、全くわかりませんで
した。今まで私はやりたいことをやってきた人生でした。なの

に虚しさを抱え込んでいたのです。本当にエホバの証人は正し
いのだろうかという疑いが常にありました。しかし、「死」と
いうものが何なのかわかりません。死、ハルマゲドン、滅び、
大艱難、それらの言葉がぐるぐる頭の中をまわり、恐ろしくなっ
て、とにかく聖書に関する知識を頭の中に入れなければ、と思
いました。今思えば、滅ぼされたくない、生き残りたいの一心
で、無理やり信じようとしていただけでした。

私と彼女は定期的に聖書の研究をするようになりました。研
究方法は「ものみの塔」の出版物を通して、理解していくとい
うものでした。なぜ直接聖書を読み進めないのか尋ねると、
「自分で読んで、間違った解釈をすると危険でしょ。聖書はと
ても難しく、わかりにくい書物だから、解説書や手引き書が
必要な」との答えでした。なるほど、そうなのか、と思いま
した。英語の勉強だって、いきなり辞書を読んだって仕方ない
し、参考書もいるのだから、そんなものかな…と。

私は昼間は学校、夜は予備校、そして土曜日の午後は聖書研
究という生活を送っていました。しかし、そんな生活も長くは
続きません。彼女の「ちゃんと予習してきた」という問いに、
「はて何を」と。聖書の研究内容はひたすら知識の覚え込み。
神の存在はとても遠くにあって、自らはなにもせず、じっとし
ていてエホバの証人に聖霊というエネルギー源、また活動力を

送る存在。イエス・キリストは模範であって、アダムと共に天秤量りの上でつり合った状態の絵が描いてある。十字架はイエス・キリストを処刑した道具であり、あんなものを首から下げたり、見えるところに置くなんて気が狂っている。クリスマスもイースターもサタンから出たものなど……。もう私は疲れていました。結局、何なんだろう。エホバの証人のいうことが本当なら、私は生き残りたくない。「死」が単に眠っている状態にすぎないなら、私は滅ぼされた方がいい。もうすぐ世の終わりが来ようが構わない。滅んでもいいから、自分らしく生きたい。絵に没頭したい。私は彼女に聖書研究をやめたいということをお話しました。私は滅んでもいいから、絵を描く生活を送る。エホバの証人にはならない、と。しかし、私は聖書を持ち歩きました。それはものみの塔が出版している新世界訳というエホバの証人が使用している聖書でした。

夏休み前のある日、その聖書を予備校でH君に見つけました。「何訳？」と尋ねる彼に、新世界訳と答えると、「それは絶対危険!!」みたいな事を言われたので、私は腹が立って「どこがどうキケンなわけ？」などと口論になったのは言うまでもありません。何せ、世のキリスト教会は全てサタンの支配下にあるものと本気で信じていた私です。彼が西南高校の生徒ということもあって、まちがったものを信じているのに、何てことを

言うんだこの人は、と本気で思いました。そのことをエホバの証人の友達に話すと、「それは正しい道を進もうとしている優吏佳ちゃんを邪魔しようとしているサタンの罠よ。耳を貸しては絶対ダメ」との返事。そこで「ああ、そうなのか。そうにちがいない」と思ってしまう私……。それからしばらくH君との会話はなかったように思います。彼に対して大いに嫌悪感を抱き、避けていたので無理ありません。

夏の講習会も終わり、二学期が始まってしばらく経った時、彼は私に『目ざめの時』という冊子をくれました。これはものみの塔の機関紙である『目ざめよ』によく似ていました。何だこれ?と思いながら、家に帰って読んでみると、何のこともかさっぱり……という感じでした。現在の救い?救いは未来のことじゃないの?いま、現在救われるって何だ?私は大いに混乱しました。それからというもの、私はH君にいろいろ質問しました。彼は西南の美術部顧問のK先生と一緒に聖書研究会をやっている、いろいろ話を聞くことが出来ました。そのうち、自分の中に、やっぱりエホバの証人が言うことは違うんじゃないか、という思いが膨らんできました。ある日、私はH君に言いました、「教会へ連れて行って」と。一九九四年一〇月二日、私は大濠公園教会で初めて礼拝に出席しました。メッセージを聞いても、何が何だか分かりません。しかし、エホバの証人の王国

会館の集会とは全く別のものであることを肌で感じる事ができました。礼拝後、大濠公園でH君といろいろ話をしました。というより、私が一方的に質問していたような気がします。それまで、人間が汚れた存在などと考えたことのない私です。過去に自分が犯してきた罪など、意識したことなどない私です。ひたすら自分を周りに良く見せようとしてきた私です。いたたまれない気持ちになりました。悔い改めという言葉など全く知らない私は、胸を締めつけられそうになったのです。苦しくて仕方ありませんでした。教会へ行かなくてはダメなんだ、なぜか本当にそう思えてなりませんでした。両親に「教会へ行く」と話すと、当然のように反対されました。私は初めて神様に祈りました。その祈りは毎週教会へ行けるようにして下さい、という内容のものでした。すると、しばらくして父が部屋に入ってきて、若いうちは誰もがそういうことについて考える。自分がそうだと思うなら、やってみろというように言うことを言って、出ていきました。その時、父が理解してくれたんだと、とっさに思いましたが、涙が溢れて止まりませんでした。神様、ありがとうございます、と泣きながら、何度も何度も感謝していました。次から次から、涙が溢れ、一体どこからこんなに出てくるんだというくらい、涙を流しました。翌日、目は腫れて、とんでもない顔になっていました。

それから、毎週礼拝に出席するようになりました。私が変わっていくのが本当にわかりました。その一つに、高二のころ、大喧嘩して人間関係がだめになっていた友達がいたのです。私も彼女もお互いに相手が悪いを通していましたし、あと半年もしないうちに卒業だから、ほっといいいか、と思っていたのです。謝る気持ちなんてさらさらありませんでした。しかし、彼女に言った数々の暴言や、周りの人々を次々に巻き込んでしまったこと、それに何よりも、彼女を本当に傷つけた自分が嫌でした。許してもらえなくても良いから、謝ろうと思いました。小学生のころから、喧嘩して雰囲気が悪くなると、決して謝るなんてしたことがありませんでした。しかし、謝らなければならぬという確信がありました。結局、彼女とは友達に戻る事ができませんでした。なんと、ちょうどそのころ、彼女の方も私に謝ろうと思っていたらしいのです。そういったことが、次々と起こりました。まるで今までの私を精算するかのようです。

そのころの私は、信仰というより、エホバの証人はやっぱり違ってたんだ、という思いにかられ、どこが違うのか、キリスト教とはどんな教えなのか、そういうところにはわかり目が行っていました。知識の詰め込みに走って行きました。イエス様の十字架も、神様も、ぼんやりとしかわかりません。H君にさかんに尋ねました。ある時彼は、「愛のない者にはわかりません」

て書いてあるからね」と言いました。はっきり言って、ショックでした。私は聖書をH君を通して理解しようとしていましたが、彼に対しても様々な矛盾を感じていました。そんな時、私の目に一つの聖句が飛び込んできました。「しかし成長させて下さるのは、神である。だから、植える者も水をそぐ者も、ともに取るに足りない。大事なものは、成長させて下さる神のみである。」(第一コリント三・六―七)

なんだかとても救われた気がしました。それから彼にいろいろ尋ねるのを止めました。

しかし、いろいろな事を「理解」しようとしていた私は、やはりイエス様も神様もかすんで見えて仕方ないのです。「救い」は未来のものだという考えが根強くどこかにあったのでしょうか。今、現在の救いとは何だろう、という感じでした。初めて悔い改めた日のこと、あの涙は鮮烈に覚えていても、それから先がよくわからない。委ねるとか、降参するとかの意味がわからない…。十字架って何だ？そして受験期になり、私は教会から遠ざかりました。

私はまだ信仰と絵を描いている自分の生活とは別のものだと考えていました。いくら神様、神様と言っても、受験に合格するような絵を描かなくては意味がないとか、本当に神様を信じているのなら、絵を描いてはたして良いのだろうか、自分

がやりたいと思っていることをするのは罪なのか、など。結局、絵も泥沼にはまり、何が何だか分からなくなり、多摩美大受験は不合格。落ちたショックなどで私は髪を緑色に染めました。

と、その日です。一九九五年三月二日、予備校から帰ってくる時、祖父が救急車で病院に運ばれていたのです。父の車で急いで病院に向かいました。祖父は私が中三の頃、一度癌の手術を受けていました。その後、回復はしていましたが、私が高二の頃、あと三ヶ月、良くて六ヶ月と言われていたのです。病院に入院せず、自宅で養生していました。手のほどこしようながなかったのです。急いで病院に着いて、病室に見た祖父は他人のようでした。次々と涙が溢れて、祈るしかできませんでした。夜中、二時すぎに祖父は息を引き取りました。正直言って、私はもう全てがわかりませんでした。神様のことがよくわからない。でも、神様に祈っている自分。イエス様に、貴方のことを知らずに亡くなった祖父ですが、貴方が導き神様のもとへ連れて行って下さい、祖父の魂を救って下さいと、祈っている自分が分かります。どこかで気休めのような気がしていました。しかし、違う違う…でも、確信がなかったのです。祈るしかできませんが。

祖父のお通夜の時も、お経の大合唱の中、一人で祈っていました。三月四日、葬式の日、私は東京芸大の入学試験へ出発

しました。大雪となり印象深い日となりました。五日の試験も頭の中は祖父の死のことでいっぱいでした。試験開始ぎりぎりまで祈っていました。精神状態はポロポロで、そんな中で描いたデッサンでしたから、まさか一次を合格するとは思ってもありませんでした。一次合格を聞いた時、「あ、じいちゃん、神様のもとにいるのかな」と何となく思ったのを覚えています。結局、その年、芸大二次で不合格。浪人生活が始まったのでした。髪は黒に戻って、浪人初期はヤル気で燃えていたものの、きつい毎日でした。絵ってなんだ？と本気で悩み、全く絵が描けない日が続きました。何とはなしに、全ての答えは神様にしか無いことは分かっていました。しかし、自ら拒んでいました。いずれ自分に必要になった時でいいじゃないか、今は自分の力を信じていれば良いんじゃないか、と。

家に帰らない日が増え、友達のアパートに溜まっては飲み明かし、人生を語る日々が続きました。しかし、酒の力を借りなければ本音をぶちまけられないなんて、虚しい以外の何ものでもありません。でも、飲まずにはやっておれませんでした。テンションを高くして、気分がハイになって、ストレスを発散して…、しかし、その後には何も残りません。酔いが醒めると、また悩みの毎日に戻って行くだけでした。

何が真実なのか。何が真理なのか。神様の、イエス様の、聖

書の中にしか、それが存在しないことは分かっていました。苦しくて、どうしようもなくて、聖書を読むことも、祈ることも、途絶えていたけれども、時々聖書に手を伸ばすと、いつも決まって開くところは、「わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである。」(ルカ五・三二)でした。聖書を開くたびに、この箇所が目にとまります。偶然よ、偶然、と思い、聖書を開くことすら止めてしまいました。

夏が終わり、秋になりました。絵の方はどうか順調に行き、学科もまずまずでした。受験まであと半年、さあ、やるぞ、という思いとはうらはらに、何かに飢えていました。常につきまとう空虚な気持ちに押しつぶされそうでした。毎朝顔を洗い、鏡で、ブリーチした自分の髪を見ては、今の私は何をやってるんだ、と思いました。髪の色を変えても、別に何かが変わるわけではありません。十月に髪を白髪染めで染めて、黒に戻しました。なぜだかわかりません。何かに向かっているような、いないような不思議な気持ちでした。しかし、一向に信仰と絵を描いている自分との接点が見えてきません。

十月十三日、予備校で描いている絵が泥沼にはまり、「ああ、やってられない!」と思った私は、大濠公園へ行き、鳩を描いていました。「何をやっているんですか」と、突然女の人に声を掛けられました。彼女の胸には名札のようなものがついてい

ました。『末日聖徒イエス・キリスト教会三原姉妹』とありました。私は「キリスト教の宣教師だ」と思いました。もう一人連れの人がいきました。私はどこの教会ですかと尋ねると、薬院にある末日聖徒イエス・キリスト教会とのことで、初めて聞く名称でした。私はこの二人に、自分は芸大・美大を目指して浪人していること、以前教会へ行っていたこと、今、神様(信仰)と絵の関係が見えなくて、分からなくて、苦しい事などを話しました。すると、彼女たちは「絵を描くというラントを神様から頂いているんだから、それを一生懸命のぼして行かなきゃ」と言ってくれました。そして「人間はみんな神様の特性を頂いている」とも。何だか肩の荷が少しおちた気がしました。今までどこかで、絵を描くのは自分の欲望だと思っていたのですが、そういうものではないのだと。こんなことを言われたのは初めてでした。そして、彼女たちは聖書について話を始めました。聖書の解釈の仕方は様々で、どれが本当かわからない。しかし、もう一つ、同じ時期に神様の導きによって書かれた書物がある。私たちはその書物を持っている。それはイエス・キリストについてのもう一つの証であると。何だ、それは、と知っている私の目の前に出されたのは、『モルモン経』という本でした。私は、この人達はモルモン教会の人なんだ、と思いました。話が聞いているうちに、今度こそ答えがあるのかもしれない

い、という期待と希望が感じられました。翌日、薬院駅で待ち合わせをして、末日聖徒イエス・キリスト教会へ向かいました。そこで私は、エホバの証人の時と同じように混乱したのです。前世、忘却の雲、現在、死、日の栄、月の栄、星の栄、等々。彼女たちはこの「日の栄」(神と共に、家族とも住み、成長しつづける)に入ることを目指して、日々頑張っているとのことでした。さらに、神様は骨肉の体を持っている。また、アダムが罪をおかしたエデンの園の出来事も、人類がこの世に満ちるための神様の計画だと、肯定的に受け取るのです。なにがなんだかわかりません。混乱したまま、家に帰りました。本当にジョセフ・スミスは預言者なのか。本当に今も預言者がアメリカにいて、モルモン教会を率いているのか。疑問ばかりです。誰かおしえてくれ。その時、私は神様が教えてくださるはずだ、と思いました。しばらくの間、聖書からも、祈りからも遠ざかっていた私ですが、本気で祈り始めました。どのくらい経ってからはかっきりとは覚えていませんが、ある確信が与えられました。今、聖書を開けば神様が答えを出してください、という確信です。聖書を開きました。「にせ預言者を警戒せよ。彼らは、羊の衣を着てあなたがたのところに来るが、その内側は強欲なおかみである」(マタイ七・一五)。やられた…、と思いました。やっぱり神様から離れては生きて行けない。もう一度大濠公園

教会へ行こう、と決心したのですが、なんだか今度は行きづらくて、行くこうにも行けませんでした。

そうしているうちに、約一ヶ月が過ぎました。モルモン教の方から電話があり、十一月二十三日にもう一度会う約束をしました。でも、会うべきなのか、どうなのか、本気で悩みました。そのころ私は、『モルモン教とキリスト教』（ウイリアム・ウツド著、いのちのことは社刊）を読んできました。鬱々と悩んでいた十一月二十二日、私は予備校の帰りの地下鉄を唐人町駅で降り、大濠公園教会へと向かっていました。四月に一度行ったきりで、それ以来御無沙汰していたので、正直に言って行きづらかったのですが、先生は私を温かく迎えて下さいました。先生と相談して、彼女らに会うことを断り、再び教会へ帰ってくる事が出来ました。

今まで「運」や「縁」でこの世は成り立ち、全てのものは常に流れの中にあると信じ、虚しいものでしかなかったこの世界が一八〇度変わりました。運が良いとか悪いとか、私はこうやって生きるべきなんだ、これが私の人生だ、と頑になっていた私。罪の重さと自我に押しつぶされそうになり、一体生きていて何になるんだろう、と思っていた私。全てはエゴから出ているのにも気づかず、自分は自由だと思ひ込み、自分で自分を縛りつけていた私。教会へ来ても、十字架の意味がわからず、こんな

に汚くて、こんなに罪深い私はどうやって生きれば良いのだろう…と、ひたすら落ち込んでいた私。そんな私の目の前にあの十字架の上から、「父よ、彼らをおゆるしくください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです。」（ルカ二三・三四）と、とりなして下さっているイエス様の姿が、鮮明に浮かび上がってきました。そうなんだ、あの十字架はこの私が掛かるべきものだったのだ。それをイエス様が身代わりとなってくくださったのだ。イエス様の十字架のゆえに、今日私は許され、ここにいるのだ。イエス様が私の救い主なんだ。「生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。」（ガラテヤ二・二〇）。自分を縛っていた自分に死ぬことができる大いなる喜びです。

今まで、私はクリスチャンに対して、あれもしてはダメ、これもしてはダメ、という自由のないような感じを抱いていました。しかし、全く違うではありませんか。上手く言葉には出来ませんが、本当の自由がそこにはありました。十九年間迷いに迷って、もう少しで崖から転がり落ちそうになっていた愚かな羊は、良き羊飼いに助けられ、救われました。放蕩息子、いや放蕩娘は十九年の放蕩の後、本来居るべき場所へと帰って来ることが出来ました。この喜びを黙っておられるでしょうか。

「わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招いて

悔い改めさせるためである。」(ルカ五・三二)。

このお言葉はイエス様が繰り返し繰り返し、私に語って下さったお言葉であったことを信じて感謝です。エホバの証人にしろ、モルモン教にしろ、当時の私にとって本当に都合の良い教えであり、そして今になっては利己的で身勝手な自我のかたまりであった自分の心をまざまざと見ることが出来る出来事でした。

今までの人生、全て無駄なものなんて一つとしてなかったこと。そして、常に渴きを覚えさせて下さって、ここに至らせて下さった神様の導き。全て感謝にたえません。私はキリスト教の奥義がどうか、教義がなんであるかは知りません。しかし、こうしてイエス様によって、救われた私がここにいることは事実です。平気で人を裁き、毎日が不満と苛立ちで満ち溢れていた私。また、人間何の為に生きているのだろうかと悩み、答えなどないのだと思ひ込ませ、行き場のない思いと吐き気だらけだった私。誰かに必要とされたい、誰かを必要としたいと思ひ、「独り」であることに怯えていた日々。立ち返る場所が分からず、思いつきり逆走していた私。そんな私ももうここで終わりです。そんな自分に死ぬ事が出来る。この上ない喜びです。感謝です。

クリスチャン・ホームに生まれたわけでもない私が、神様を知ることができ、本当に不思議としか言いようがありません。

「あなたの若い日に、あなたの造り主を覚えよ。」(伝道の書一・二・一)の聖言が響いてきます。自分の全てを神様に委ね、何が起こっても、その背後にいらっしゃる神様を、導いて下さるイエス様を信じ、信頼して生きてゆく生涯でありたいと願っています。



カナダからの来信

カナダの(旧姓名 西原文江) 姉からのたより

カナダのオンタリオ州では、小学校六年(幼稚園二年間)、中学校二年間、高等学校は大学へ行く学生は五年間、進学しない場合は四年間と成って居ます。サムエル君(御長男)の高校では、九九%が五年迄進学する様です。

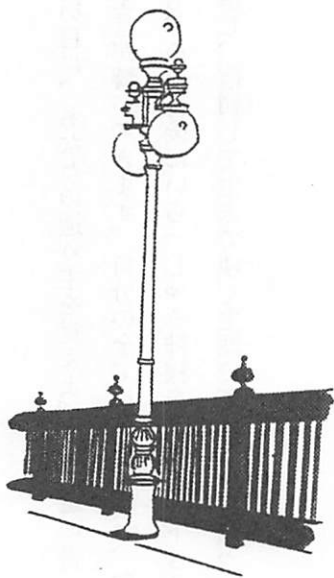
大学は全部国立です。カレッジなどは州立もあります。サムエル君は、トロント大学工学部に合格されました。ハンナさんは、昨年(多分一昨年でしょう)トロント大学を卒業され、仏文学専攻と英文学の(B.A.) だそうです。弁護士を目指して昨年(Windsor Law school)へ進み、今年(一九九五)は二年生です。

三年間のコースを終えると、一年半の実習と一年間の資格試験を終えて、漸く弁護士として働く事が出来るそうです。カナダでは法学校は全国で十三しかなく、大学の学士号を得たあと、入学試験でどこかの法学校にでも応募出来る様に成っています。大体競争率は十七倍だそうです。



(写真左から)

文 珠 姉
ハンナ 姉
サムエル 兄
李



カナダだより

T・I

一九九五年もあと数日となったころ、トロント(カナダ)在住の鈴木和子姉からお便りが届きました。戦後はじめて持たれた日系人合同のクリスマスコンサートで、長男圭一兄(カナディアンネームはDaniel Suzuki)がピアノ演奏で大きな働きをされ、皆さんから喜ばれた事が記されていました。いろいろ解説するより、プログラムをほぼそのまま紹介しましょう。(原文は英語を主とし、日本語で対訳してあります)

ジョイ・オブ・クリスマス

ー日系ファミリークリスマスー

一九九五年十二月十六日 午後七時

オーディトリウム プロアストリート ウェスト二五二番地

主催: トロント日系キリスト教会連絡会

☆皆さんと一緒にキャロルを歌いましょう(着席のまま)

歌詞はうしろにあります。

開会: トランペット ファンファーレ「荒野のはてに」

Steve Kimball(Trumpet)

Daniel Suzuki (Piano)

キャロル「諸人ごぞりて」 Wesley Chapel Worship Team

(着席の#)

独唱「もろもろの谷は高くあげられ」メサイア(ソプラノ)の

Makoto Yusa(Tenor)

Daniel Suzuki(Piano)

「ソナタ へ長調」ジョン・バプティスト・ロワイエ

Seichi Ariga(Flute)

Daniel Suzuki(Piano)

合唱「主の栄光見上げ」

Cross Hill Band & Choir

「東からも西からも」

「世界ではじめのクリスマス」

「天に栄光、地に平和」——インマヌエル

キャロル☆「まぶねのイエスさま」 (着席のまま)

☆「きよしこの夜」

「くるみ割り人形」——チャイコフスキ

Joshua Tamayo(Piano)

独唱「アヴェ・マリア」バッハ/グノー

Yoriko Tanno(Soprano)

Daniel Suzuki(Piano)

「我が魂よ主をほめたたえよ」——クリスマス物語

(内容説明は後記)

Rev. Sonje Pearson

——休憩十五分——

「ラ・カムパネルラ」(鐘)——パガニーニ／リスト

Daniel Suzuki(Piano)

合唱「クリスマスの夜に」——竹田由彦

「いざわれらベツレヘムにゆかん」——オーストリア民謡

United Church Choir

Kayoko Okagaito(Piano)

キャロル☆「神のみ子は 今宵しめ」 (着席のまま)

☆「み使い歌いて」

「輝けるセラフイム(サムンン)」——ヘンデル

Mari Hahn(Soprano)

Daniel Suzuki(Piano)

Steve Kimball(Trumpet)

「クリスマス メドレー」 Elizabeth Officer(Piano)

「ハレルヤ・コーラス」メサイア(ヘンデル)より(会衆起立)

Joy of Christmas Choir

Makoto Yusa(Conductor)

Daniel Suzuki(Piano)

閉会 Rev. Edward Yoshida

* * * * *

説教要旨「我が魂よ主をほめたたえよ」(省略)

(一九九六・三・十三)

神様の栄光 (続)

大田 邦子

月日の経つのは早いもので、主の豊かな恵みの中に懇ろに守り支えられ、家族一同で闘って来ました主人の第一回の入院手術から、やがて二年を迎えようとしております。

この間、この様な者をも顧みて、ご真実を以て応えて下さいました主のみ業の数々、言い尽くすことの出来ない主のご愛に心からの感謝を捧げさせて頂きます。

瘻孔との闘い

昨年のお正月に、主治医のK部長先生から、年賀状を頂きました。それに、

「今年こそ完治に向け努力します……」

と書かれていました。エッ、まだ努力の段階?どうなっているだろう。まさかこの一年半の間に併せて四回、延べ三百九日の長期入院することになるうとは、その時は夢にも思っていないませんでした。

わが思いは、あなたがたの思いとは異なり、わが道は、あなたがたの道とは異なっていると

主は言われる。

(イザヤ 五五・八一九)

平成六年六月、再手術で胃全摘の手術中のトラブルからおきた、食道と小腸との縫合は、奇跡的に繋がりが癒されました。所が、縫合の一部が細菌による感染症から、難しい瘻孔となって胸部に残り、その傷口が何時までも塞がらず、年が明けてからも毎日通院しての治療となりました。

厳しかった再手術後の十月、回復の兆しが見え出した頃、「もうすぐお風呂に入れて、快適な生活が出来ますよ……」と、K部長先生の励ましの声も何時の間にか遠のき、一年過ぎてても、「もうちょっとですがね……、なかなか綺麗になりませんね……」の言葉と変り、何とかしてと、忍耐をもって処置して下さる先生のお姿が気の毒な様、お気持ちが一ひしと伝わって来る様になりました。新年の「完治に向け努力します」のお言葉、こう言うことだったのかと、納得出来ました。

主人も私も、勿論完治を願って祈ってりましたが、主の憐れみで、あの厳しい中を生かして頂きました今、完治がなくとも、一生肩まで浸っての入浴が出来なくても、この位の後遺症は、主のご愛の記念のしるしと感謝して受け止め、すべて主におおねし、主のみどころにお従いすることを心に定めておりました。幸い病院が近く、歩いて通うのに丁度よい距離、リハビリを兼ね通院が日課となりました。

七、八、九月、暑さの中でしたが、主に守られ支えられての毎日、その中、朝夕秋を感じる様になりました。九月末、K部長先生から、

「もう一度手術して開けます。今度は三泊四日で……」と。私共も短期間と言うこともあって躊躇なくお従いし、十月二日第四回目の入院となりました。

あなたがたは、心を騒がせないがよい。

神を信じ、またわたしを信じなさい。(ヨハネ 一四・一)
榎本先生にお祈りして頂き、又、教会の皆様からのお励ましとお祈りを心から感謝しました。

肋骨をとる以外に

全身麻酔で九回目の手術、もう受ける方もベテランです。祈って聖言に立たせて頂き、身も魂もその日の為に備えさせて頂く。丁兄よりお電話で、ご自分の体験の時強められたと……聖言を以てお励ましを頂き、感謝でした。

恐れてはならない、わたしはあなたと共にいる、……
わが勝利の右の手をもって、あなたをささえる。

(イザヤ 四一・一〇)

入院した夕方、驚くことが……、久し振りに会う準夜勤の看護婦さんがにこやかに、

「又来られましたね、今度こそ最後になる様に祈ってます……。大田さん達を見ていると、本当に神様がおられるのだなあと思いました」と。

嬉しくなりました。生きておられる主に目を覚まされた思い、正に強く雄々しかれと押し出されました。どうかこの病院からも、真の神様を求める魂を起こし主のみ名が崇められます様にと祈らせて頂きました。

十月三日 午後より手術、約一時間で終わり説明室に。

又しても思いがけないK部長先生の説明。

* かなり大きく七センチ位開けました。

* 細菌感染によって、骨髄炎を起こしています。

* 肋骨の中もすっぽんすっぽんで一部腐骨も見られます。

* 肋骨切除以外に完治はないので、今日開けた傷口はそのままして、もう一度手術することにします。

当初、三泊四日の予定が、予想だになかった肋骨切除で、再度十回目の手術に胸が痛みましたが、骨髄炎を起し、汚いものがいっまでも瘻孔から出つづける状態だから、骨も綺麗な部分まで切除されると判り、原因がはっきりして感謝でした。主が懇ろに教えて下さいました。

K部長先生も、最後に重い選択と決断をされたご様子がお伺えます。「大丈夫、恐れるな、わたしだよ、わたしを信じなさい……」

と強めて頂きました。

ついに十回目の手術に

十月五日（木） 時々、傷の痛みを訴える、可哀想。

K部長「手術は十三日金曜日にと思いますが、いいですか」

主人「ハイ結構です」

K部長「大田さんはクリスチャンでいらっしゃるから、十三

日金曜日は嫌われるのではないかと思ひまして……」

私 「いいえ、そんなことに捉れません、よろしくお願ひ

します」

十字架に目を止めさせて頂き、蘇られた主に寄り頼む。

十月八日 聖日礼拝

主は言われる、わたしがあなたがたに対していただいている計画はわたしが知っている。それは災を与えようというのではなく、平安を与えようとするものであり、あなたがたに将来を与え、希望を与えようとするものである。

(エレミヤ 二九・一一)

この世的には正に、これでもか、これでもかと揺さぶりをかけて来ますが、聖言にきっちり立たせて頂きました。

十月九日（月） 丁度私の留守中、ご用多い中、榎本先生がお見え下さる。

とこしえにいます神はあなたのすみかであり、

下には永遠の腕がある (申命記 三三・二七)

神様ご支配の幸いな住まいに住ませて頂き、全能のみ手に支えられている毎日、手術前に整えて頂き、恵みの時を感謝しました。イエス様有難うございました。今夜の食事は大変調子よく沢山頂くことが出来ました。

十月十一日(水) 検査の結果、Y先生より手術の説明。

「体位を横にして、第七肋骨切除、炎症の状況により二本の場合も。又、胸膜にさわることもあるかもわかりません。若い時の肋膜炎のあとの癒着があるので、肺に少し傷がつくかも知れませんが、すぐ処置出来るので心配ありません。全身麻酔で三時間位……」

新たな処置に恐ろしくもありましたが、すべて私達を知り尽くされている主が通される道、「永遠の腕に支えられている……」動かされることなく、主人と共に平安の中にお委ねすることが出来ました。手術を執刀される先生方、看護婦さんの為に切にお祈りする。

十月十三日(金) 午後一時、手術室に入る。予定より早く約二時間で「終わりました」の連絡が入る。説明室のドアを開けると、机の上のトレイに長短二本の肋骨が並べられている。腐骨の部分で折れ、色が変わっている。長いもう一本は真っ

白な綺麗な骨、主人の胸から取り出されたものと思うと胸が詰まる。

K部長「肋骨一本だけ完全に切除しました。胸膜には全然触っていません。背中では縫合しました。胸は開けたままで、これが最後になって貰わないと困るんです
が」

先生も祈る気持でいらしたと思います。先ず無事に終えたことを感謝、癒しと憐れみを切に祈る。

この時、創世記 一一・二一

『そこで主なる神は人を深く眠らせ、眠った時に、そのあばら骨の一つを取って、その所を肉でふさがれた。主なる神は人から取ったあばら骨で……』

の聖言が頭に浮かぶ。助け人として造られた者の分をわきまえ知りなさいと、又、居るべき所を新たに教えられました。

銀杏の大木を見上げて

K部長先生の回診の度毎に先ず「食べてますか、歩いてますか……」の励ましに、私も昼と夜は病院で主人と一緒に食事を囲み、少しでも食べて欲しいと願い、前の様に差し入れも兼ね食事運びに、せつせと病院通いが始まりました。

病院に行く途中、公園にある二本の銀杏の大木が日毎に深

まる秋を告げてくれます。ある日、ふと足もとに黄熟した実が落ちています。「あ、銀杏」と思わずビニール袋に拾い、見上げると緑の葉の間に可愛い実が一杯、時を待つ様に風に揺らいでいます。日毎に落ちる数も増え、強い風の時にはポトポトと音を建てて落ちて来ます。

毎日十〜二十粒程拾い、持帰り綺麗に掃除して火を通すと中から何と美しい透き通った緑／＼、寶石のヒスイを思わせる緑、口に入れるのが惜しい程に……。季節の移ろいと共に、神様の造られた自然の賜物に心潤された感謝のひとつときもありました。先日の礼拝で教えられた聖書の聖言が浮かぶ。

あなたに、暗い所にある財宝と、ひそかな所に隠した宝物とを与えて……。(イザヤ 四五・三)

この様な者が十字架に贖われ、どのような中にあっても恐れなく、希望を与えられ、神様のご支配の世界に生かされている幸い、健康な時には見出し出すことの出来なかった宝物に目がとまり、嬉しくなりました。

もう度々の手術に手術馴れしているものの、傷の大きさや体力の消耗など、見えるところで不安がよぎったり、心騒ぐこともありましたが、主のお交わりの中、

「見えるものによらないで、信仰によって歩みなさい」と、本当に聖言に寄りすがりながら歩まさせて頂きました。

主のあわれみで、抜糸もすみ、開けられたままの傷口も「綺麗で汚いものは出ていません……」とK部長。どうやら順調な回復の様、感謝の中に祈りつつ十一月を迎えました。

完治を目の前にして

十一月二日(木)

K部長「傷口の赤みも減り、今度はいいですよ。お風呂に入れる様になりますよ」

主人「エッ／＼お風呂に入れるなんて夢見たいです。」

K部長「大丈夫、もうちょっとです……」

これを聞いた私、素直に万歳と喜びたいのですが、昨年から手術の度に「もうちょっと」「もうちょっと」の長かったこと、信じるのが恐ろしくもありました。主よあわれんで下さい、「ただ、わたしを信じなさい」とイエス様の声。

廊下で院長先生にパツタリとお会いする。懇ろにおっしゃって下さいました。

院長「今度は大変よい様で……、これが最後になってくれる様祈っています。」

私 「有難うございます。」

十一月十一日(土)

K部長「汚いものは出てません、もう時間の問題です。」

主人「本当にお世話になりました。」

K部長「いやいや、完全に直ってから……」

慎重な中にもK部長先生の明るいお顔、素直にと思いつつもまだ手放しでは喜べない、その中、思いがけない退院のお話しがチラッと、明日の回診の結果にと……。やっと私も今度は本物なのかなあと少し元氣が出る。

十一月十四日（火） 回診の際、

K部長「通院でも入院でも傷の経過には変りがないので、ど

ちらでもいいですよ……」

もう嬉しくて、婦長さんに相談し、バタバタと、午後より退院させて貰いました。ナースの方々から「もう戻って来ないで……、でも元氣な顔は時々見せて下さいね」と。感謝の祈りを捧げて、感無量で病室を後に。

ハレルヤ一年半ぶりにお風呂に

退院後は毎日の通院から隔日の通院となり、ガーゼもだんだん小さくなってゆきます。

十一月二十七日（月）

K部長「水曜日、診療の結果お風呂に入れるかも知れません」と。

私 「エッ／＼本当ですか？」明後日が待たれます。

十一月二十九日（水） 待った診察の日、OK、ガーゼがとれ

ました。

K部長「お風呂に首までどっぷり浸って入って下さい、頭ま

で入らないで、溺れますから。」

と冗談がでる位。

主人、私「有難うございました。」

K部長「長くかかってすみませんでした。」

K部長先生もどんなにホッとされたことか……。涙があふれそうになりました。病院から解放される喜び、感慨一入。イエス様有難うございました。明後日の診察を約束して帰る。

帰宅後、一年半ぶりにガーゼやテープなしの上半身、傷口の全容を目にした。縦、横、斜め、見るも無残な、目を逸らしたくなる傷跡、胸が痛みました。

でも、今は言い尽くせない感謝の傷跡、病氣の経路を思い起こして感無量でした。

夜は夢の様な全身浸っての入浴、ハレルヤ、主のお恵みとあわれみに心からの感謝を捧げました。

十二月一日（金）

もう師走、主のご隆誕の月を迎えました。今日の病院行きは少し興奮気味、足も軽やかです。銀杏の大木もすっかり実りを終え葉を落とし、泰然自若と静かに佇んでいます。春の支度をはじめのようです。診察室に入るなり、

K部長「温泉に入れましたか？」

私 「ハイ、登別（入浴剤）で……」

そして終始にこやかに診察。

K部長「いいです、大丈夫です、よく頑張られました。」

私「有難うございました、先生本当にお疲れ様でした。」

主人「卒業証書を出して貰わなくてはいけませんね。」

K部長「そうですね。」

私「完治ですか。」

K部長「ハイ完治です。」とはっきりと重みのあるお言葉。

もうこの言葉は聞けないのでは……、と思っていただけに、感動の一瞬、主の栄光を拝させて頂きました。

「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」と問われ、「……見たので信じたのか、見ないで信じる者はさいわいである」主の前にひれ伏すのみでした。

完治ノ、神様の栄光

長い間、主治医のK部長先生も辛くていらしたと思います。何とかしてと、懸命に忍耐、そして決断、処置に心から感謝しました。すべてに主が備えられた「時」を覚えずにはおられませんでした。

見よ、わたしは主である、すべて命ある者の神である。
わたしにできない事があるうか。

(エレミヤ 三二・二七)

榎本先生にご報告、感謝させて頂きました。先生ご夫妻はじめ、主に在る皆様のお祈り、本当に有難うございました。

平成六年五月、健康を誇っていた主人に、神様の愛の鉄槌、

胃癌の宣告に端を発し、病との闘いの日夜、何も頼るものはなく、ただひたすら主との交わりの中、祈りつつ、必死に聖言に寄りすがりながら、主と共に歩ませて頂きました。

一年半の闘病生活を振り返った時、榎本先生のお説教の中で、「イスラエルの民が四十年、荒野の旅に導かれた時が、一番幸せではなかったでしょうか」と教えられたことが、今は実感を以て受け止め、私も本当に幸いな時でした、アーメンと感謝することが出来ます。

十回の手術(大田さんはオペ室の主ですね……、と院長先生が言われた程に……)に耐えさせて頂きました。信仰も出たり入ったり、有る様で無い不真実な私共ですが、主のあわれみで完治にまで至らしめ、主の栄光を拝させて頂きました。

人知をはるかに越えたキリストの愛、「こんな愛をもって支えているんだよ……」と、懇ろにみ声をかけて頂き、主ご自身を手ざわる様に知らせて頂きました。

神様からの最高のプレゼントを心から感謝いたします。
わたしは神である。今より後もわたしは主である。

わが手から救い出しうる者はない。
わたしがおこなえば、

だが、これをとどめることがきよう。

(イザヤ 四三・一三)

(平成八年五月)

主のお導き

山羊っ子

【近頃おしえられたこと】

一九九五年 夏も盛りを過ぎたかにみえる日の昼下がり、涼風を求めて縁側に立った。

見上げれば一片の雲を残して、青空は果てしなく高く澄んでいた。

「もろもろの天は神の栄光をあらわし、大空はみ手のわざをしめす。この日は言葉をかの日につたえ、この夜は知識をか之夜につげる。話すことなく、語ることなく、その声も聞こえないのに、その響きは全地にあまねく、その言葉は世界のはてにまで及ぶ。」
(詩篇一九・一一四)

万物を創造し支配なさる神様が、森羅万象にご自身を現し、大きなお声で大衆に、小さなみ声で私ども一人一人に語りかけておられる。太陽・月・地球を見事に配置し、無数に星を散りばめて、その場所を保たせ、又移動させておられるのであろう。地球の上にはみ心のままに人を造り、命の息を吹き入れて生き

るものとして下さった。この山羊っ子も草深い片田舎に生を受
け、小さく怯えていた者を引出し、憐れみを注いで下さり、不
思議な経緯をもって、思いがけなかった大濠公園教会まで導い
て下さったのである。本当に山羊っ子にまで「人は何者なので、
これを見心にとめられるのですか」。

感謝とおそれにおのきつつ、み前に今日も送っているのでは
る。

朝ごとに新しい力を与え、生気に満たして下さる主、少しも
のうく、しかしまたここで主を呼び求めて、夕べに静まるまで
伴って下さる主が、その日の営みを助けて下さるのである。

「わたしはふして眠り、また目をさます。主がわたしをささ
えられるからだ。」
(詩篇二・五)

あと幾許の地上なりや知らず。いつその場所から取り去られ
ても主のみ前に立てるように、今はその備えの時である、と今
日の火曜会でこんこんと諭される。

「気をつけて、目をさましていなさい。その時がいつである
か、あなたがたにはわからないからである。」

(マルコ 一三・三三)

万物の終わりが近づいている事は事実である。(山羊っ子の終わりはそれよりも更に早いと思う)。思い残すことなく喜んでみ許に行けるように、み前に立つ事ができるように。どこを切っても、そこにキリストがあらわされていなければならぬ、とたたみかけて先生が語ってくださった。その日にはタドン玉のように真っ黒な山羊っ子を恙の純白の衣で被って下さり、み前に立たせて下さるのである。なんと驚いたことであろう。その時はきつと感謝に泣き崩れてひれ伏すであろう。またある時は棕櫚の枝を持って真っ白の麻の衣を着せて頂き、天国の礼拝に連なることができるであろうか。そのためにはなら、どんな事にも耐えて…と思いめぐらせていると…。

ふと真昼のしじまを破って、急を告げる羽音に驚かされた。見ると、隣の庭のいちじくの大きな葉の裏に、今しも飛んできた、疲れた蝉が辛うじてぶら下がり、四、五回バタバタと羽ばたいたが、力尽きて落ちてしまった。と思ったら、もう一度扉の向こうに飛び上がり姿を現した。しかし、また四、五回羽ばたいて繁みの中に、二、三回ひっかかりながら、あとは急速に落ちて行った。それで終わったのである。もとの静寂が戻った。造られたとおり、短い命を全うして、一羽の蝉は地に落ちた。神様のみわざに目を瞞るばかりである。蝉の鳴かない夏などは考えられない。暑い夏を演出して鳴いて鳴きつくしてチリにか

えって行った蝉よ、ご苦労さん。神様ありがとうございます。しかし、一度地に落ちた蝉がやり残した仕事でもあったかのように、力をふりしぼって再び飛び立とうとしたがかなわなかった。遅かった。既に、命の限りがきていて、間に合わなかったのである。

主は山羊っ子の目前にその様を見せて、もう一度今日のお言葉の重大さを示して下さったのである。目を覚ましていなさい。いつ、どこで命をおとりになるかわからないからと。いつみ前に立たされても、裁きに耐え得るように、刻一刻をみ旨に従っていくようにと。

七十歳を越すまで、山羊っ子に猶予を与えて下さって、本当によかったと思う。きょうこの聖言を聞かせて、戒めを肉碑に刻み込んでくださったのである。

【主のご愛を知るために】

私には去年まで一つの重い重い荷が負わされていて、長い間、主に取りのけて下さるように祈り願ってきたが、どうしても取り去られなかった。

何故、なぜ、この上何をすればよいのですか、と悩みの日々は実に二十数年続いた。他のことは殆ど全て順調に過ぎ、身に余る幸いを頂き、感謝を捧げていた筈であった。しかし、一番

肝心な所で、主は姿を隠される。お前の負うべき十字架はこれだとばかり、頑に首を横にふっておられる。よりによってやぐざなんかを私の側に置かなくても、と少しばかり恨みがましい気さえしながらも、傲慢にならないようにとの愛のトゲかも知れない、と苦しい容認を自分に強いたりなど。それでも将来への不安は払拭しきれず、神様のみに心に納得できない部分を残したままであった。

そんな時、和義先生が教会へ遣わされてこられた。献身なさるまでの経緯を伺い、主が人に迫って下さる時の業に驚いたものである。神様は「誰が信じようと、信じまいと、厳然とみわざを進めておられる。その中に私どもも組み込まれている」と。私はなにか新しいことを聞いたように深くうなづいた。

またある時、「わたしは主である、わたしのほかに神はない。わたしは光をつくり、また暗きを創造し、繁栄をつくり、またわざわいを創造する。わたしは主である、すべてこれらの事をなす者である。」(イザヤ 四五・六一七)

この聖言を与えられた時、私はつむじ風の中から、主がヨブに語られたときに、「ただ手を口に当てるのみです」と神様の威力の前に驚いたヨブの姿そのままになった。「わたしは知りません、あなたはすべての事をなすことができ、またいかなるおぼしめしでも、あなたにできないことはないことを」と、ヨブ

のようにチリ灰の中で悔いつつ主を見上げるだけだった。

また、「生れ出た時から、わたしに負われ、胎を出した時から、わたしに持ち運ばれた者よ、わたしに聞け。」(イザヤ 四六・三)、「耳を傾け、わたしにきて聞け。そうすれば、あなたがたは生きることができる。」(イザヤ五五・三)の聖言を通して、「静かにわたしに聞け」、聞け、聞け、「来て、わたしに聞け」と、長い眠りから呼び覚まされる思いだった。

そうだ、私は主の前に来ることも少なく、聞きかたが足りなかったのである。なまぬるいから吐き出そうとは、私に向けられたお言葉であった事に気がついた。

そして、毎回、神は愛である、人知をはるかにこえた愛、限りなき愛をもって汝を愛したと宣う神様。私のことを名指して心配して下さっているそのお方は全能者であられることを語られる。私に対して持つておられるこの神様のご愛を私は知らなすぎたのである。

見上げれば十字架。イエス様は侮られ、人に唾せられてもあらがわず、自らゴルゴタの丘をのぼられ、両手を釘づけられ、高々と立てられた恥辱の十字架について下さった。槍で突かれても手でおおうこともできず、一滴々々血を流しながら、どんなに痛く苦しい長い時間であったろう。最後には、

「わが神、わが神、なんぞわれを捨て給うや」と父なる神様に

おすがりになっても、何の応答も得られなかった。罪なきお方が極刑を受けて死んでくださったのである。人間の罪を一身に負うて、身代わりとなって、償いを全うして下さったのである。神様は絶対に曲げられないご自身の義と、愛してやまない人間への憐れみの思いのはざまにお立ちになって、遂に御独り子を地上におくり、人の罪を負わせて十字架上に断罪なされたのである。こうして愛なる神ご自身のご意志を貫かれたのである。

曖昧なもののみじんもない。きっちり道を立てて、人間への救いを完成して下さったのである。実にイエス様お一人が犠牲となられて忍びとおしてくださったのである。なるときびしい道のりであったことか。すべては私ども一人一人の救われる為の出来事であった。

この事の故に、今我々は罪人でありながら、その罪が覆われ、許されて神の子としての人生を賜り、間もなく永遠のみ国へ入れて頂けるのである。こんなお恵みがどこにあらう。これほどの愛がどこにあらう。

ここに至って、もう世の諸々の出来事は陰をひそめ、側に居すわるヤクザを居りたくば居るべし、全ては主の御手のうち、もうこんな事でびくびくすることはない。重大なのはいのち。このいのちを罪の中から贖いとして下さったイエス様が居てくださる。このイエス様だけが生き甲斐、あとはどうでもよくなっ

ていった。

各集会での聖言を通して、贖われた者は贖い主の持ち物、わが人生ではない、自分であくせく生きる必要なしと、教えらる。イエス様がわがうちにあって生きて歩いて下さるのであるから、生活のことも、毎日なすわざも、経済も健康も病気も、将来のこと老いも死も一切を主が引き受けて支えて下さる。一番よい時に、一番よい事をなして下さるのだから、この方をのみ見上げて、目先のことに動かされるな。今日示される目の前の一步を歩めばよろしい。地上の命はもうほんの僅か、私どもには永遠の都が備えられていると、大安心の道を示して下さい。

本当に私の崇める神様は王の王、君の君、小さな一人一人の動きにも、思いにも対応して下さいるかと思えば、世の思想も知り、歴史を導き、支配なさり、現れている万物も、見えない霊界も、時間も空間も全てを掌握なさっている、唯一のお方である事をはっきり教えられたのである。

【神様のみわざ】

事の始まりは、和義先生の牧会にあずかる様になって、おそるおそるではあったが、ヤクザの事を申し出て、お祈りをお願いした。お祈りのあと、先生はおっしゃった「急いではならない。お祈りしておかなければ」と。何事にも性急な私を見てとっ

ておられたのである。祈ってみ業を待つことをきつく教えてくださった。

こうして、ご愛の中に安堵して、足取りも軽く教会に行き帰りする途中、滅多に同道することのない兄弟と連れ立つ事となり、話がヤクザの事に及んだ。聞けば親愛なる兄弟は日頃からヤクザに悩んでいた私の事をご存じで、祈っていて下さった様である。誰もが介入しながらないこの種の問題にとことん係わって下さり、細やかに行き届いて下さり、弁護士紹介から、裁判の決着、完全立ち退きまで、親身になって面倒をみて下さった。

平成五年九月、建物明け渡し調停から裁判の決着まで、当方の手順どおりに進行して、六年九月、きれいに掃除をして立ち退いていったのである。初めの話では早くて三年或いは五年位腰を据えてかからねば、とのことであったが、神様の時が満ちれば事は速いものである。ただ、啞然として神様の進められるみわざの中で感謝を捧げるのみだった。

思えばこの建物に関しては、先の家の火災、新築、とその後長い道のりを榎本利三先生が陰になり日向になって、お祈りくださり、支えてくださった。建築という転機に立った時、家までお越し頂いて、お祈りのあとにおっしゃったお言葉は今も耳に新しい。「あなたが火災にあったということは……」、独り言

のように言われて、深く私のことを案じて下さるそのお姿が忘れられない。折りにふれて思い出され、神様からの戒めを頂いてきたのである。

又、戸畑教会の伊規須先生を折りよく家まで送って下さった神様に感謝せずにはおれないのであるが、十数年前、ヤクザの問題で打ちひしがれていたとき、印刷の事でお越しくくださった先生が座敷のまん中で、ひざまづいて祈って下さったのである。それ以来、折りある毎に尋ねて下さり、折りつづけて下さったのである。

本当にあちらこちらから祈りののろしがあげられていた中で、神様はそのお祈りを受け止めながら、ヤクザを係わらせた初期の目的達成まで、その日早かれと、忍耐して待っていて下さったのである。なんと厄介な山羊っ子だった事だろう。しかし、主は憐れみを注いで、長く長く忍耐して下さって、和義先生を遣わしてく下さり、教え諭して十年近くを育てて下さり、練って下さり、今ヤクザの手から釈放して下さったのである。その上、なお付録をつけて、今余生を楽しませて下さっている。なんと幸いなことであろう。願わくば、いつ、どこでも、そこから天に帰れるように、身も魂も思いも汚れをみなきよめられて、恐れなく目前に立てるよう、切に御霊のお導きをお祈りするばかりである。

「水は深くなって、
越え得ないほどの川になった」

津留崎 浩行

昨年のある晩の祈禱会の折、

「一日のうち、殆んど時間を神様との交わりに捧げるくらい
励んでいますか」

というお話がありました。私の日常からはほど遠いことだな
と思いつつも、その言葉は深く私の中に入っていました。

十二月の初めのある日、ぶどうの木を読んでいるうちに、私
共に与えられている恵みは、他には数少ない特別な恵みであり、
此の聖霊の流れを見過ごしてはいけません。その中にしっかりと
身をまかせていかなければならないと、強く示されました。

「今は恵の時、今は救いの日」此の今の時をぼんやりと過ごし
てはいけません。唯感謝、感謝ではなく、本当に神様に感謝して
いるなら、具体的に歩み出すべきだ。

そう示され、悔い改めて、一日の時間のうちできるだけ多く
の時間を聖書の拝読と、祈りに捧げさせていただくよう決心し、
歩み出しました。

その日からほぼ十日程経た十二月十日の午後の感謝会で、皆

様のお証しを聞いているうちに、エゼキエル書四七章にある聖
霊の流れが此の前田教会にも注がれていることを感じ、これは
ただ事ではない、しっかり耳、目を開いて聖霊の声、御業を聞
き取り、見抜いていかなければいけない、そのために、ひと足
ひと足主の御旨に従って歩むことがまず第一であることを示さ
れました。

一方、此の世の支配者である、悪の霊も黙って見てはいませ
んでした。十二月十三日から三日間強い咳に悩まされ、肺炎予
防の為飲んだ薬の副作用で体中に赤疹ができ、各集会も休みを
取り、聖書の拝読も三日程休む結果となりました。幸い聖霊は
その様なアクシデントの後も導きを絶やすことなく、逆に新た
な力を与え、励ましをもって導いてくださいました。

待ち望んでおりましたクリスマスも、礼拝、祝会ともども、
今迄のどのクリスマスよりも恵まれたものとなり、新年聖会に
向けて心を新たにいたしました。そして、現在まで読んでいる
聖書の残りページを調べ、毎日拝読している聖書のページ数を
増やして、今年中に旧新約を全部読み通すように大体の計画を
立てました。信仰は、神様に捧げる時間の長さだけではないと
思いますが、私にとっては、神様との交わりに捧げる時間は、
多いほど恵まれるように思いますし、日々の歩みで反省すべき
点、一心の足りない点など、主の導きも深くなるように思いま

す。

さて、年も新しくなり、新年聖会を迎えました。標語を通して、今年、神様は私の主であることを改めて示されました。

『わたしは神である、今より後もわたしは主である。』

此の聖句を見たとき、神様は私に名指しで、主となり給うたことをお告げくださいました。そして、聖会第一日目の夜の集会で、主となってくださった神様は、私に僕となることを求められました。ルカによる福音書一・三八で、神様を主として私の中に受け入れることは、私が神様の僕となること、主の僕とは、命を賭けて主にお従いする者となることを、マリヤの信仰、決心を通して教えてくださいました。

『見よ、あなたはみごもって男の子を産むでしょう。その子をイエスと名づけなさい。……』

当時の律法によれば、石をもって打ち殺されるこの御告げを御使いから受けたマリヤは、御告げを受け入れることで起こる全ての恥も、困難も、其の上命を捨てることも覚悟の上で神様の御旨に従いました。

『わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身に成りますように。』

此の信仰告白を主の前に捧げたときから、マリヤは聖霊に満たされ、イエスの母となりました。此のルカによる福音書一・

三八のマリヤの言葉は、十字架の上から主が我々全てに求めておられるものであり、私自身が日々の歩みの中で、いつも主の前に捧げるべき信仰告白の言葉であることを強く示されました。何が起ころうと、此の言葉を恐れなく主の前に言えるように、堅く主に従っていかう。その為には、いつも主の前に自分を置いていかねばならない。集会の欲びの中で、主はそのように私を導いてくださいました。

今年の聖会は、私にとって、此の一日目夜の集会が全てでした。

生ぬるい毎日から半歩でも踏み出して、主の前に近づきたい。その思いで歩み出して四ヶ月、その間まことにたどたどしい歩みの毎日、反省することばかりですが、主に今日まで保っていたできました。

此の四ヶ月、サタンの妨げも激しく、風邪で寝込むこと二回、下痢で起きられなくなること二回、原因のよく分からない微熱で集会を休むこと度々、現在は右ひざの水と各所に出る赤疹で、夜熟睡できず、ぼんやりした頭で集会に出ることも度々です。しかし、主は一日も、正に一日も、私から平安を取り上げ給いませんでした。そればかりか先日、コリント人への後の書七・

四（文語訳）

『我は慰安にみち、凡ての患難の中にも喜悅あふるるなり。』

の聖言を頂き、歓びに胸躍る思いでした。

この聖言は、私が昭和二十二年頃、主のお救いを頂いた歓びにあふれて、たまたま福岡西南学院教会の集会に出かけたとき、お証しの中で使わせていただいた聖言です。集会のあと、西南学院の河野貞幹先生が、

「貴男は恵まれていますね。」

と言ってくださったときのことをはっきり思い出します。

私の患難など、コリントに手紙を送ったときのパウロの苦しみには比ぶべくもありません。けれども、主は折にふれて、慰めを送ってくださいました。全て主の一方的なご愛によるものです。

昨年十二月から、この四月迄の主の恵みの一部を、日記的に順を追って書かせていただいたため、まとまりのないものとなりましたが、今、主が前田教会を選び、榎本先生を通して、御霊の注ぎを増々強めておられるように思えてなりません。エゼキエル書四七章にありますように、くるぶしからひざ、ひざから腰、腰から立って歩けなくなるほど、御霊がどんどん注がれているのかも知れません。その流れの中にどっぷりと浸り込み、御霊の流れの中に、御霊の思うままに流され、生命の大河へと流されていくことを、主は待っておられるのかも知れません。『また一千キュビトを測ると、渡り得ないほどの川になり、水

は深くなって、泳げるほどの水、越え得ないほどの川になった。彼はわたしに「人の子よ、あなたはこれを見るか」と言った。』
(エゼキエル四七・五一六)
しっかりと目を開いて、御霊の流れに目を注ぎ、飛び込んでいく者になりたいと思います。



我が思い出 (五) 中国 (旧満州) 編

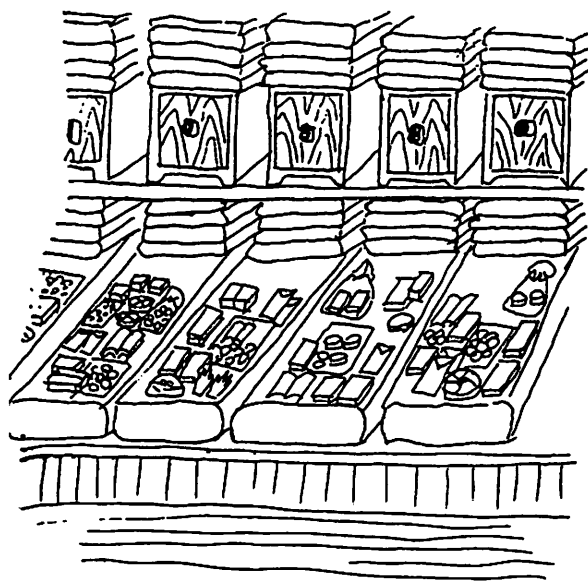
鈴木 一 幹

一、神は我が牧者なり

所持品検査の指示により、我々初年兵十二名は、各自の寝台の上に所持品を並べました。金子上等兵殿は皆に「気をつけ、全員一歩前、回れ右」と号令をかけ、寝台と初年兵との間隔を開けさせ、廊下側に位置している野中二等兵の寝台前に行きました。他の

上等兵殿二名も金子上等兵殿に倣いました。

軍隊での寝台は「五尺の寝台蕎布団」と言っていたように、木綿の



布団袋に打ち蕎が入れてあるもので、厚さ約二〇センチ、幅約七〇センチ、長さは約一六〇センチ、就寝時は敷布でくるみ、これに枕分を残して毛布でくるみ、枕を後で並べていました。丁度封筒の中にもぐり込むようにして中に入れて寝ていました。皆はこの寝台の上に所持品を並べました。勿論奉公袋等は中身を出し、その袋の上に並べました。

金子上等兵殿は「おい、野中二等兵、この本は何の本か」と質問があり、野中君は「はい、この本は入隊時父からもらった般若心経であります。」と答えると、「お前は仏教信者か。」との質問に、「はい、自分の家は真宗の寺であります。」と答えた。今度は他の上等兵殿が「おい、この写真の若い女の子はお前のこれか。」と言って小指を示して尋ねました。野中君は「これは自分の妹であります。」と答えると、「嘘を言うな、お前に似とらんやなかや、これはおれが預かっておく」と言ってポケットに入れました。また、もう一人の上等兵殿は財布の中を開き、「おい、この中に五円札で二枚、十円入っとるぞ。入隊時の規則では所持金は五円以内になっているじゃろう。これは違反やで。五円札一枚おれが預かっておく」と言って、これまたポケットに入れました。

次の緒方二等兵のところに移りました。この緒方君は入隊前は土建会社でトビ職人をしていたよし、誰よりも気性も荒く、

気も短い男で、両腕には竜の入墨がある人物でした。金子上等兵殿が「この本は何や、マンガ本か」と尋ねました。緒方君は「マンガ本ではありません。講談社の猿飛佐助であります。」と答えた。「こんな本は初年兵の時はいらないのではないか」と言って、ペラペラと頁をめくっている内に、中に挟んであったのか、一枚の写真が出てきました。女優のプロマイドでした。と、「よし、これは没収や」と言って、これも自分のポケットに入れました。さらに緒方君の大形財布を開け、中の硬貨と紙幣を出し、調べ始めました。

「おい、これは二十円以上あるぞ。これも規則違反や。そうだろうが」と、大声でどなりました。緒方君は「はい、そうでありませんが、おふくろが出発の時こっそりくれたものであります。」と答えました。すると「これは違反だから五円を残し、あとはおれが預かっておく」と言って取ろうとしたが、緒方君は手から離さず、顔も怒りで青白く見えた。その時金子上等兵殿は「貴様は上官の言うことが聞けないのか」と言いながら、緒方君の両頬に平手打ちをくわせました。緒方君がとり落とした財布から、五円を残し、他は全額自分のポケットにねじ込みました。緒方君がじっと我慢している様子がうかがえました。

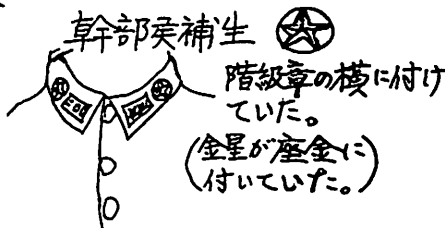
金子上等兵殿と他二名の上等兵殿は同じ三年兵で、今の時間帯は、四年兵や五年兵は全部特別勤務で不在となっていて、班

内には初年兵と数人の二年兵、三年兵、それに幹部候補生の上等兵（二年兵）が数名いたが、皆三名の三年兵には手も足も出せず、ただ傍観するのみでした。同じ中隊内では、下士官以上を除き、年功が権力の順位となっていたわけです。

軍人の階級章

一般兵	☆	二等兵「初年兵」 赤布に黄布の星1つ
	☆☆	一等兵、星2つ
	☆☆☆	上等兵、星3つ
下士官	■	兵長、赤布に金筋1本
	☆☆	伍長、上記に金星1つ
	☆☆☆	軍曹、金星2つ
	☆☆☆☆	曹長、金星3つ
	■	準尉、縁取白に金筋1本

将校	■	少尉、上記に金星1つ
	■	中尉、上記に金星2つ
	■	大尉、" " 3つ
	■	少佐、" 金筋2本金星1つ
	■	中佐、" " 金星2つ
	■	大佐、" " " 3つ
	☆☆	少将、" 金台、1つ
	☆☆☆	中将、" " " 2つ
☆☆☆☆	大将、" " " 3つ	



廊下側から野中君、緒方君と二人の検査が終り、次は戦友の川上君の番になりました。金子上等兵殿は「おい、お前の奉公袋の下にある写真はどこで写したのや。」と聞きました。「はい、僕が入隊の時に三菱造船所の経理課一同で入隊記念に撮ったものであります。」と答えると、「僕とは何や。軍隊では自分のことは名前を言うのや。川上と言うんや。もう一度言い直せ。」

「はい、川上が入隊の時に経理課一同で記念に写ったものであります。」と答えました。「そうか、しかしこの写真にはほとんど男はいないやないか。お前の横に並んでいる男は誰や。」はい、川上以外に男子社員は七名居りましたが、ほとんど招集され、それぞれ陸海軍に入営し、最近では横に居られる課長と二人だけになっていたものであります。」と答えました。

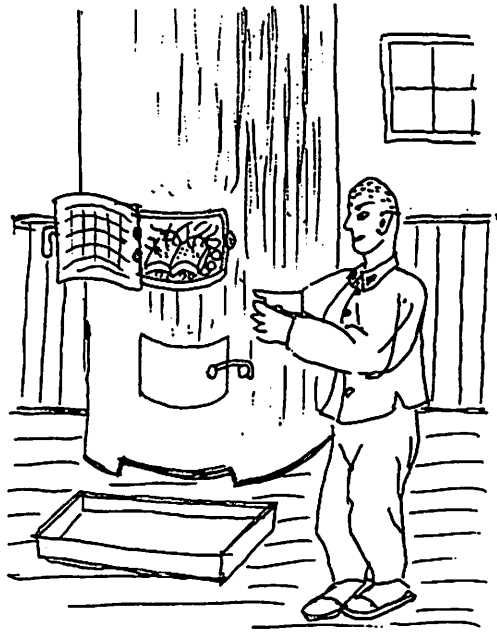
すると金子上等兵殿は「女ばかりの中で写った写真等見るのも女々しい。こちらによこせ。」とどなりました。川上君は写真を手で握りしめたまま渡そうとはしませんでした。その時金子上等兵殿は、いきなり川上君の右頬に平手打ちをくわせ、「よこせといったらよこすんだ。」とどなりました。川上君の体は左によろけ、そのはずみに眼鏡が飛び、持っていた写真も落ちました。金子上等兵殿は、その写真を拾うと直ぐに奥にある真赤に燃えているペチカの口を開け、その中に投げ入れました。川上君はよろけながら、飛んだ眼鏡を拾い掛け直しました。川

上君はその時唇をかみしめ、眼には光るものが見えました。金子上等兵殿は再び川上君の前に立ち、「貴様は幹候やな。大分たるんどるような。貴様の様なやつが、あと一年もして将校や下士官になってたまるか。今後おれが充分かわいがってやるから覚悟しとけ。」と言いました。他の上等兵殿が、油紙の袋を見付けました。「これは何か。」はい、鉛玉であります。」と答えると、「ほう、これはおれが預かっておく。」と言って、胸のポケットに入れました。

「では次や」と言って、いよいよ四人目の私の前に来られました。私は寝台の前の方から奥の方に向かって、軍人勅諭、戦陣訓、洗面具、救急薬品類、便箋封筒、財布（五円入り）、千人針、ナタ豆入りの腹巻（母の手造り）、家族で写った写真、一番奥に奉公袋の上に聖書と讚美歌を並べて置いてありました。上等兵殿三人は手分けして調べ始めました。

財布の中も調べていたようですが、五円のみで、これで終ったと思ったとき、金子上等兵殿が一番奥に置いていた讚美歌と聖書を見つけ、大きい方の聖書を手にして、「この本は何の本か」と尋ねました。「はい、それは聖書であります。」と答えると、「なに聖書だと、耶蘇教のか。貴様は耶蘇教か」と言われました。私は「はい、キリスト教であります。」と答えました。「そうか、信者か、耶蘇教の本尊は何か言ってみい。」と尋ね、

金子上等兵殿の顔は紅潮し、顔を引きつらせて言いました。私
は意を決して「キリスト教では全知全能の神であります。」と
答えました。すると「キリスト教は外国の宗教だろう、しかも
今、日本と戦っている米英等での宗教だろう、そんな敵国の宗
教信者は非国民ではないのか、そんな宗教は直ちに止めてしま
え。何が神だ、我々軍人が信ずる神は、『氣をつけ』、おそれ多
くも天皇陛下である。現人神と言うではないか、お前が信ずる
神と天皇陛下とどちらを信じるのか、返事をせい。我々軍人は、
国のため、天皇陛下のためにご奉公に來ている。毎朝点呼の後、
東方揺拝（宮城の方向に向かって陛下に最敬礼をすること）を
行っているのは何のためか。貴様は今から耶蘇教の神を捨て、



天皇陛下を信ずることだ。よいか。」といいながら、聖書の表
紙をめくりました。

表紙の内側には、「神は愛なり。」と墨書され、その下に行橋
教会牧師、湯浅雅人と署名があり、さらにその下に横英文で外
人宣教師の I・L・セーバーとサインがしてありました。
（セーバー先生は、行橋教会に当時伝導のため、毎月一回程度、
大分県中津市から來られていた宣教師で、母が聖書にサインし
てもらっていたものです。私が小学生時代に日曜学校に通って
いた頃、セーバー先生がにこにこして、大きな手を私の頭の上
に乗せ「貴方は良い子です、きつと神様が守ってくれますよ。」
と言われた言葉がよみがえりました。）

「この外人のサインは何じゃ、この毛頭かぶれめ」と言いなが
ら、手に持っていた聖書をいきなりペチカの炊口を開けて投げ
込みました。みる間に聖書は青白い炎を上げ、燃え上がりまし
た。金子上等兵殿はペチカを離れ、再び私の前にもどり、「貴
様も幹候やな。それなら尚更や。今から関東軍の軍人精神を叩
き込んでやる」と言って、私の左頬から殴り始めました。掛け
ていた眼鏡は飛ばされ、隣の川上君の後の寝台の足に当り眼鏡
の縁が折れ、レンズが転がりました。

だんだん殴る力も加わり、左右と交互に続き、七、八回まで
は数を覚えていたが、その内何回殴られたかも分からなくなり、

痛さも次第に感覚が無くなって行きました。母の推めで、聖書と讚美歌を持ち込んだばかりに、こんなひどい目に合うとは思ってもみなかったわけです。神様が守ってくれるどころか、大變な目に逢っている、このままでは死んでしまうのではなからうか。情けなく、うらめしくも思えた。まだ制裁が続いている、とその時、金子上等兵殿が大きな声で、「野中二等兵、バケツに水を汲んでこい、早く行け」と命じました。数分後、水の入ったバケツが金子上等兵殿の前に用意されました。私は、この水をどうするのだろうか、私の頭にかぶせられるのかなと思っていると、金子上等兵殿は、おもむろに、履いている右足の手縫いのスリッパ（軍隊では上靴と言っていた。）をバケツの水にしばらく浸し、水を吸って少し軟らかくなったスリッパで再び殴り始めました。最初の一発を受けた時は、眼が真っ暗になり、その中で頭の頂上から無数の星が飛び散りました。生れて始めての経験でした。右、左と殴られる毎に星の飛び散る数が増え、体がぐらつくのを感じ、その内全く意識が無くなりました。どの位の時間が経ったかわかりませんが、初めに母の声が聞こえました。「一ちゃん、しっかりせんね、これ位のことでは負けてどうするね」と言っていました。それから行橋教会の教壇で、湯浅牧師のしゃがれ声が聞こえました。「エホバは我が牧者なり、われ乏しきことあらじ、たといわれ死の谷をあゆむとも禍

害をおそれ、なんじ我とともに在せばなり。」と、聖書の何処に書いてあるのか、新約か旧約のどちらに書かれているのか全く判りませんでした。その内意識がもどり、数人の初年兵に抱えられて起こされました。一番先に目に入ったのが佐藤班長殿の顔で、その横に川上君の心配そうな顔が見えてきました。佐藤班長殿の「鈴木二等兵、しっかりせい。おれが判るか」と言われ、川上君に「川上二等兵、寝台に寝かしてやれ、そして洗面器に水を汲んできて頬を冷やしてやれ」と命じました。それから班内全員総立ちになっている兵隊達の前に金子上等兵殿と他の二人の上等兵殿も立たせ、「貴様等三人は誰の指示命令で私物検査をしたのか、しかも勝手に制裁をした。平素から中隊長殿から注意されているではないか。それから、ポケットに入れてあるものを全部出してみよ」と命じました。三人はポケットに入れていた預かり物、没収品の本や写真、紙幣まで全部机の上に出しました。これを見た佐藤班長殿は「貴様等、所持品検査を理由に金品をくすねるとは何事か」と叱り、三人並べて平手打ちを食わせました。「今直ちにそれぞれに返してやれ」と命じ、返品させました。そして班内最古参の中村兵長殿（五年兵）に事の次第を説明し、以後三名について厳重に注意するよう命じました。それから「全員に言って置く、良く聞け。宗教は仏教であれ、神教であれ、キリスト教であれ、我が国の憲

法で信教の自由が保障されている。おれもカトリックの信者であるが、皆と同様国に尽くす心に変わりはない。皆よく覚えて置け」と言っていて、解散を命じ、私のもう一冊の讚美歌を持って班長室に帰って行きました。これ以後ついに所持品検査は私どもりで終り、その後検査はありませんでした。やっとほっとすると同時に顔の痛みが走り出しました。両頬は腫れ上がって、口は全く開きません。しかも左の口の中に石様の固まりが、ざらざらし、口に溜まった唾液をちり紙に受けると欠けた歯の一部と血が出て来ました。川上君が湯飲みに汲んで来てくれた水で、少しずつうがいをして、口をすすぎました。川上君は一晚中タオルで冷やしてくれ、戦友としての恩は決して忘れることはできません。

寝台に休んで眼を閉じ、制裁を受けている時のことを考えました。神



様が私の身代わりに聖書を召され、私を守り生かしてくれたのではないだろうかと感謝し、今後どんな困難にも、苦しいことに会っても、神が私の牧者として、導き守ってくださいと信じ、感謝しました。

翌朝点呼後、佐藤班長殿より「具合はどうか、まだ痛みはあるか」と声を掛けられ、中隊長殿の許可証の貼ってある讚美歌を返して下さいました。従って今後は晴れて讚美歌を持つことができ、しかも自分がクリスチャンであることが班内に公認となりました。川上君の一晚中の看護のお陰で、幾分痛みもやわらぎ、朝の点呼にも参加できましたが、頬は腫れ上がってまだほてっていました。

週番士官の宮崎少尉殿が到着、佐藤班長殿が「週番士官殿に敬礼。頭右。直れ。第四班総員五十四名、入室（連隊本部の医务室に入室している者）一名、伝騎（中隊長殿外の営外居住の将校を、乗用馬を連れてお迎えに行っている兵）三名、馬舎当番四名、北門衛兵二名、砲廠衛兵二名、以上勤務兵計十一名、合計十二名、差引現在人員四十二名、番号。」と号令を掛けました。宮崎少尉殿は兵一人一人の顔や服装を見て廻り、私の前に来た時「鈴木二等兵、顔はどうした。頬がはれているが」と尋ねられました。昨夜殴られて、このようになりました。と正直に昨夜のことをありのまま報告すると大変なことになります、し

かも佐藤班長殿にもご迷惑をお掛けすることになると思い、

「はい、昨日から奥歯が痛んでおります。」と答えました。週番士官殿は、顔をつくづくと眺めながら、「佐藤班長、鈴木二等兵は本日は練兵休にする。午前中医務室に行かせ治療を受けさせる」と命じました。朝食になったが、口がほとんど開かないので、味噌汁だけやっと口の横から吸いました。

医務室の軍医殿は鈴木という中尉殿で、同じ姓で、受診の際は「貴様も鈴木だな、歯痛と言うがカップを食ったな（カップとは満州での軍隊言葉で、叩かれることを言う）。左下奥歯二本欠損や。それに左右口内打撲裂傷だ。古藤衛生兵、口内消毒、リパノールガーゼを噛ませとけ。お前は明日も来るように。」と言って、治療を衛生兵にまかせました。古藤衛生兵殿は治療をしながら、「歯が痛い言うて来る者は貴様だけやない。ここに来る初年兵は、ほとんど、歯が痛んではれたと言って来よるわ。」とのことでした。治療を終え帰班したが、中食は汁物が無く、仕方なくお茶を少しずつ吸いました。

二、国への手紙は二行のみ

中食後の休み時間に中村兵長殿より、「初年兵全員集合。今日は貴様等に国への葉書を出させる。今から一人一枚宛葉書を配るので、受け取れ」と言われて、皆に一枚ずつ配られました。

入隊以来二か月が経過したが、未だ一度も便りを書いていなかったわけです。中村兵長殿はなおも続け、「今から書く文言を言うからそのとおりに書け。それ以外のことは一切書いてはならない。よいな。まず、文面だが、一行目は皆様お変わりありませんか、二行目は、私も元気でいます。以上。次に表面には左側に当住所と氏名を次のように書け『満州第八七二二軍事郵便所宛付、満州第二二部隊前田隊』次に自分の名前だ。宛名はそれぞれ自分の家の住所と名前だ。五分したら集める、書方はじめ。」と指示されました。全員書き終え、葉書を集めた中村兵長殿は中隊事務室に持って行かれました。夕食後、中村兵長殿は再び初年兵全員を集め、次のように言われました。「葉書に二行のみ書かせたのは、防謀上のためである。文章に訓練がひどいとか、食事が悪いとか、寒さが厳しくなったとか書くと、それが直ちにスバ

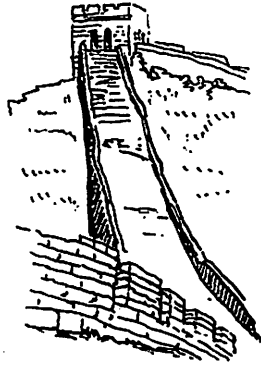
表
福岡県京郡行橋町行事社
鈴木美保 称
便はかき
満州第八七二二軍事郵便所
宛付満州第二二部隊
前田隊
鈴木一幹

裏
皆様お変わりありませんか
私も元気でいます。

イに洩れ、敵の作戦に役立つことにもなりかねないからだ。お前等の中に二人だけ指示した二行以外の文章を書いた者が居る。

緒方二等兵と佐々木二等兵だ。前に出る」と言った。

佐々木二等兵は入隊時に父親の病気が悪化していたので、心配のあまり指示以外のことを書いたとのであった。一方、緒方二等兵は入隊当時、残した妻が丁度出産予定の月であったので、生まれていれば男か女か、名前は何と名付けたかを尋ねる文章を追加して書いたとのことでした。が違反と言えば違反かな、と思った。二人は中村兵長殿より一発ずつカッパをくらい、「直ちに書き換える」と命ぜられ、再提出させられました。軍の規律だかは知らぬが、実に個人の人格を無視した、情無用の扱いだなど、我ながら情けなく思った。(以下次号)



心の風景 (その二)

山中良美

五月十五日

母よ、

結婚して二十年

一日も休まる日なく

毎日のように お金の工面をし

子を育てて来し母よ、

私はまるで他人事のように

何一ついたわることさえしませんでした。

あなたがどこからか借りて来る、

それくらいに思っていました。

そして、あなたを責めていた。

母よ、

他の人なら とうの昔に子供を捨てて

逃げだしていたかもしれませぬ。

二十年たった今も、

あなたはいる。

母よ、

私は何一つ良い考えは浮かびません。
どうしたら良いかもわかりません。

けれど つとめて祈ります。

神様は祈りをきいてくださる。

私にできるのは

祈りだけです。

「父」

父よ、

六十二歳を迎える父よ、

どうか まだ 救いがあることを

忘れないで下さい。

きっと あなた自身も

苦しんでいたに違いない。

あなたも弱い

私も弱い

ただの人間にすぎません。

父よ、どうか たち帰って下さい。

逃れる道を

神様へと向けて下さい。

人には救えない

けれど

天の父は救って下さる。

父よ、救われるのです。

どうか 望みを捨てないでください。

六、七年間も丹精をこめて育てた芍薬の花が

今年ようやく蕾をつけ、咲いたという。

その花を、今日、洗礼を受けし我が為に、

むさらきつゆ草と一緒にもってきてくださった日姉。

主にある愛を心から感謝します。

洗礼うけし 吾のために

七年待ちし 初花の しゃくやく切りて

贈られたる うれしさよ

「祈り」

主の栄光を表すことに用いられたために、私は今までの道のりを与えられました。まことにあなたのご計画のもとに、そしてあわれみと愛とをもって救っていただきました。主よ、大いなる主よ、感謝します。私が苦しみに会ったことは本当によいことでした。あなたの愛を示していただいた

からです。主よ、何と叫びましたらよいのでしょうか。私にも目をとめて下さるとは。

人間はいろんな動物や人の体までつかって

いろいろな知識を得たけれど、

それで良かったのだろうか。

医学の発達で多くの人が助かり、

命も与えられたけれども

本当にそれでよかったのだろうか

神様の前に喜ばれることだろうか。

「なみだ」

神様とイエス様を知る前は

一人になると考え込んで

寂し涙を流してた

神様とイエス様を知った今は

涙を流す相手がいる

よろこびとありがたみの涙を流す。

「みえないもの」

すべての人のうしろに イエス様を見られるありがたさ

何をするときも イエス様を相手に

イエス様に仕えるように

「いのり」

天のお父さま

訴えんとする人のこころをわかってあげられませんか

電話口から聞こえる私の実家は

学生の頃のあのまんまで、しあわせの余韻も響きません

私はまるで人ごとのように 話をききます

自分のことしか考えていない母とおば、

酒に逃げてしまう父、そして今いる私

家族だから何とかしなければ、というよりも

多くの人のためにわたしは何かすべきのような気がして

自転車をこいでいました

心でもう家のことをあきらめきっている

父と母とおばを、その心をすくって下さいと

祈ることさえしようとしません

神様、

いったい私の心はどうなってしまったのでしょうか

本当に私は愛のない人間です

神様、私は今

何をなすべきなのでしょう

困難も苦難も

神様のご愛

信仰のこころみを与えてくださり

にぶった私を立ち返らせてくださる

そこから逃げよう のがれようとするけれど

イエス様も通られた

イエス様も苦しみ 嘆き 死ぬほど悲しまれ

父なる神様のみ旨に従って歩かれた。

私の十字架をおうて、罪を負って

命を捨ててくださった

イエス様を通られたのに

私を通らずにおられようか

何一つ一人でできない弱いちりのようなものだけど

守ってくださる方がいる

よりのためば 助けてくださる方がいる

全てのこころみは みたまから来る

サタンではなく 神様の内からくる

自分の痛みよりも

人の痛みがわかるようになりたい

自分の苦しみよりも

人の苦しみがわかるようになりたい

自分の弱さよりも

人の弱さがわかるようになりたい

自分の喜びよりも

人の喜びがわかるようになりたい

きれいごとではなく

心の弱いわたしがそうおもった

車椅子にのって 教会へきた

あのおばあちゃんを見ておもった

六月十日

私のおかしてきた罪のため、凝り固まった自我が心を覆って、み言葉を拒む心に苦しみます。

「あなたがたは生まれながらにして罪の子である」

人の罪がどうして人の裁判でゆるされましようか。イエス様がどんなにか限りなくキリストであるかを思います。この方がいなかったならば、誠にわたしは生きていながら、無に等しい滅びの人間でした。名もしらぬ日本の、名譽もなにもない、田舎生まれのこの私をどこでどうして知って

くださったのでしよう。

身も飾らず、人の顔色うかがうこともなく、先のことを思い煩わず、人を癒され、自分の幸せなどつゆもおもわれなかった。

いかに私はおろかであるか、罪の子であるかをおもいます。いかに救いが命であるかをおもいます。

六月十二日

病院でウソをついた後日、言うべきか、黙っておこうか、

私の心は葛藤の中にありました。洗礼を受けて一カ月足らずの時。神様に許しを乞うて祈っても平安が得られず先生に告白し、帰途についたその夜の記録です。：

今、この問題が置かれて、選択しようとしている時が恵みの時。自分の恥になるかもしれない。人の信頼を失うかもしれない。しかし、ここが神様の栄光をあらわすときであり、自分を捨てるときであり、恵みの時であると教えられました。すでに神様はゆるしてくださっているのだから、大丈夫だと。心の平安とは、自分がおだやかになつたからとか、安心して納得したから得られたというのではない。心は騒いでも、み言葉を信じて立つとき、み言葉をつかんで「主よ、信じます」というとき、すでに得ているのであ

ると。信じて思っているだけではいけない。それを行う者が天国に入る。

主よ、どうぞ　うそつきを全て告白していく力を与えて下さい。その場に立ったとき、力を与えられて、堅く立って、神様の栄光を表すことを信じます。主よ、み旨のままに導いてください。従わねば、わたしは滅びです。「どうせ死ぬなら、敵陣へいこう」と立って行ったらい病人のごとく。

翌日、わたしはまちがいを告白しました。

先生に告白する前の記：

人は間違いをおかしつづける

そのまちがいがこわい。

まちがいをおかす自分がこわい。

おおまんて、小さなミスをする自分を知っているから自分がこわい。

「看護婦に向いているのだろうか」

「自分にはあわないのではなからうか」とこわくなる。

けれども、この仕事は、神様から出て、神様が導いておられる道であり、私の向き不向きではないことを思う。まちがいが許されない仕事といわれる。

けれど人間はまちがいをおかしつづける者だ。

自分がこわくなる。

主よ、教えて下さい。

どのようにして、歩めばよいのか、教えて下さい。

本当のことを話した日、讚美歌三二六番と二二一番が思い

出されました。ヨハネ一二・三五とエペソ五・八、ピリピ

二・六一も力を与えてくれました。

そしてなにより慰めとなったのは

「しかし、光にさらされる時、すべてのものは、明らかに
なる。明らかにされたものは皆、光となるのである。」

(エペソ五・一三一―一四)

「明らかにされたものは皆、光となる」

汚れた罪が明らかに主の光にてらしだされ、さらけだされ
た時、その汚れた罪をも光とかわえて下さるということがど
んなにかなぐさめであったかわかりません。

六月十七日早朝

近頃、うたたねして電気をつけたまま寝てしまう。

この世においては人との気疲れも多い。

きつとどの職場においてもそうだと思う。

「主のみ旨ならば、わたしは生きながらえもし、あれもし
よう、これもしようと言うべきである」とどこだかに聖言
があったが、望むなら天国へ帰りたい。そこはパラダイス
であり、もはや思いわずらいも、悲しみも、自ら出るそね
みも何一つなく、とある。この世に疲れてしまう。

人間は本当に罪人だ。

全てが自分の事しか考えていない。

人を傷つけても、自分は傷つきたくない。

愛していくより、自分が愛をうける方を望む。

自分の目で見える範囲のこと、自分の知識でしか考えない
から、望みがない。

不幸な人を見ても、自分にふりかかる犠牲を恐れて

見ぬふりをする。

人の評判、人の目を気にして、打算する。

悲しいかな。

名医にかこまれ、命ながえるより

一杯の水に飢え渴き死のう、

神様のみ旨ならば。

一杯の水に渴く人の心がわかる者になりたい。

どこまでも謙遜になりたい。

六月十九日

私はなぜあんなに愛というものに固執したのだろうか。

「愛がわからない。イエス様がわからない」ただそのことが重くのしかかり、せっぱつまっていた。何カ月か前のことである。教会へと足を向けて七カ月、洗礼を受けて一カ月程たつ。会社を辞めて、あと十日でちょうど一年。神奈川県から福岡へ来てもうすぐ十カ月。予想もつかぬ展開のうち、今ここにいる。一から十まで私のはかりごとはなく、どうして今、神を知りここにいるのか、考えるたびに、何度考えても不思議でならない。神様はどこでどう私に目を留めてくださったのだろうか。

七月二日

中学生の頃から、自分が育った環境をうらんだけれども、神様はそこに季節ごとに豊かな自然を与えて、人の造り出せぬ美しさをあらわしておられた。収穫を喜ぶことも、土を耕すこと、こやしの臭いも、椿の木にめじろ取りの仕掛けをしたこと。今思えば有り難い。

七月七日

あまりにも律法的になりすぎて、真面目にしなればと力

を張りすぎていた。自分の力は何もない。今までやってこ

られたのは、神様のあわれみと恵みだったのに、いかにも自分の努力や何かで出来たように高飛車になっていた。

「もっと条件のいい家に生まれていたら、私は立派になつてたかも。もっと別の生き方が出来たかも。上品で、素直な人間になつてたかも」。

全く、自分のことはそっちのけで、育った環境にばかりけちを付けていた。

けれど、どこに生まれ育とうと

「義人はいない、ひとりもない」と聖書の言葉どおり神様が目を留めて下さらなければ、全ては無に等しい。

七月二十六日

人はいつからか信じることをしなくなった。

確かな約束、破られることのない約束を見ることができなくなった。自分の他は信用できなくなり、自分の力で生きていく道しか信じられなくなってしまった。

信じきってしまったその奥に、素晴らしい神様の賜物があるのに、二十年間私は。

人の世はどうしてこんなに汚れてしまったのだろうか。

私の心はどうしてこんなに醜くなってしまったんだろう。

これが人間は罪の子ということ。

私は罪の子として生まれた。

罪の子がすぐわれた。

どうして私がすぐわれたのだろう。

八月十九日

歳末助け合い募金、赤い羽根募金。

そのたびに母にお金をせびった。

「わが家が募金してもらいたいくらい」と言われた。

母が本当に苦労しているのをあの頃は知らなかった。

自分の醜さを知るなら

もっとうめき声をもって

もっと深い怒りを、失望をもって

叫びの声をあげるべきではないか。

おえつをもって訴えるべきではないか。

人を評価するのは間違っていないか。

私たちが評価するべきことじゃないか。

人が人を評価するのを聞いてそう思う。

けれど、

そういうこの私も、そう思うその時に

人を評価している。

九月九日 早朝四時半

“地のちにひとしかり、何一つとりえなし

今あるはただ主の愛に生くる我ぞ

みすくいを受けし、罪人にすぎず

されど我、人に伝えん 恵み深きイエスを”

私は人に仕えているだろうか。

神様に仕えるわざとして、人に仕えているだろうか。

人を鬱陶しく思ったり、さげすみの目で見ていないか。

罪人のかしらであることを忘れ、

人を上から見下ろしてはいないか。

十一月二日

小さい頃は怖がりの臆病者

夜中、便所に一人じゃ行けなかった。

怖いテレビを見ると今も平安を

奪われる。

でも、神様が一緒にいてくださるのを

覚えられるのは幸い。

寮の中、一人夜を過ごす。

十二月二十七日

昨日、電話で母がいなくなったことを聞く。

平成七年一月二日

母のこと家のことに思い煩い、心に覆いが掛けられた。

信じられぬ今、主の試み。

「見よ、わたしは新しい事をなす。

やがてそれは起る、

あなたがたはそれを知らないのか。

わたしは荒野に道を設け、

さばくに川を流れさせる。」(イザヤ四三・一九)

一月十八日

皇太子夫妻がテレビのニュースに出ていた。

見ていた人たちの一人が

「なかなか子供ができないね」と言った。

結婚して以来、子供が出来なかった方が

パッと声の方を振り向いた。

人は知らないうちに、人を傷つけてることがある。

一月三十一日早朝

誕生日だ。今日で二十二歳。とりわけかわったところもな

いけれど、一晚炬燵にうたた寝した。

右腕が二回もしびれた。

風邪を引きかけているらしく、のどが少し痛む。

二十二回目の私の生まれし日 雪降れば

「誕生日を祝ってる」とナースが言う。

たった一枚のポスト・カード。

「良美 二十二歳の誕生日おめでとう」

ランタンキュラスの花 きみちゃんより

半額で買った花瓶に チューリップ三本

早すぎる春を楽しむ。

二月十三日

私たちはどこから来て、どこへ行くのか

知らされた私たちは幸い。

肉体は土に帰り、霊はこれを授けられた

神に帰る。

二月十四日

汝ら心を騒がすな。神を信じ、また我を信ぜよ。

三月九日

“生き甲斐”という言葉を思い出した。

生き甲斐って何だろう。

生きている甲斐がなくては

人は生き得ないものなのだろうか。

三月十日

ヨハネの第一の手紙 三章一九―二一節

神のみまえに心を安じていよう。

なぜなら、たといわたしたちの心に

責められるようなことがあっても、

神はわたしたちの心よりも大いなる方であって

全てを御存じだからである。

私は人を愛せない。どうしても愛せない。

愛するとはどういうことなんだろう。

愛するとは命を捨てること。

私には愛せない。今まで誰一人として愛した事がない。

激しい情熱をいだいたことはあっても、

愛したことがない。

愛していたのは自分自身だった。

神様、あなたが愛することを望まれるなら、

そのように変えてください。

私自身では愛してゆくことはできませんから、

そのように変えてください。

私は愛ということが

ひどくわからないでいます。

三月十二日(日)午後十時

愛するとはどういうことか、先生にたずねた。

愛するということは、ゆるし受け入れるということ。

私が命を捨ててまで愛されていることを知るならば、

しぜんとゆるし、愛していくことができる。

まずイエス様の愛で満たして下さい。

あなたの愛を与え、もっと増し加えてください。

根っこは聖言を信じることにある。

行いは結果として現れるもの。

礎は聖言を信じること。

でも、信じたごとくに踏み出さねばとある。

それができるにしろ、できぬにしろ。

とにかく主はまず踏み出すことを求めておられる。

信じるとは、ただ心の中で思うことのみではない。

まずイエス様の愛で

満たしきって頂くことを求めてゆこう。

四月二日

アベルの供え物を神が受け入れられ、カインの供え物は拒まれた。神のなさることに對してカインは怒った。ゆえに、アベルを殺した。私が怒り、ねたみ、腹をたてていたことは神に對するものであることを改めて思わされた。「すべての道で主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる」。

三月か四月のある日

イエス様は私に何を求めておられるのだろうか。
人にへつらうことではない。人の機嫌をとることではない。
ただ一つ、イエス様を愛すること。
愛するとはどういうことだろう。愛するとは命を捨てること。私は命を捨てて、自分を捨ててイエス様を愛しているだろうか。自分を大切にしていまいだろうか。
自分に死んで、初めて私は生きる。人の本分に戻る。
自分に死ぬ訓練。

「ヨハネの子シモンよ、あなたはこの人たちが愛する以上に、わたしを愛するか」。

六月五日（日）伝道集会にて。

「日々、救い主と共に、なれは歩みいるや」

毎日、一日一日、イエス様と共にあなたは歩んでいますか。

目の不自由な人は導き手に引かれなければ歩んでいけない。私たちは盲人である。イエス様に手を引かれなければ、目前に歩むことはできない。

「いかなるときにも、なれは十字架に頼れるや」

今、この道、キリストの明かりに照らされた細き、狭き道以外は闇である。

六月七日（火）火曜会にて。

神様、人の前に立つのではなく、
いつも
神様の前に立っていくことができますように。
行いも
話をする時も
いつも
神様の前に行い、
話をする者でありますように。

六月二十一日（水）実習帰り、舞鶴公園にて

あめんぼう

青い体の糸とんぼ

黄色いすいれんの花が

雨に濡れて咲いている
朱色のさくらの花が

雨つゆをおびて

つやのある緑の葉の間に咲く。

世間の騒々しさや

私の心の内などよそに

ただそこに

ありのままに

雨にうたれて咲いている。

神様のおこす風に

その枝は身をまかせ

吹かれれば揺れ、

雨しづく落ちれば

体ぜんぶで うけとめて

ただ そこに咲いている。

それなのに

何と静かで

あざやかで

美しいのだろう

なんと命を感じさせられようか

感 謝

園 田 幸 子
(母 能 美 イ チ)

主の御名を讚美致します。いつも母のためにお祈り下さって有難うございます。何年間も、今度こそ皆様に感謝の気持ちをお伝えしたいと「ぶどうの木」で思い乍ら、筆不精の故に大変失礼致して居ります。現在母は、主にあつてすぐく平安に保たれています。一日の大半は眠ってばかりですが、耳元で大声で話しかければ、はっきり返事をして、食事もよくかんでしっかりいただいで居ります。九十七年間、神様は色々な中を通しながら、愛し慈しみお守り下さいました。今は一日一日を感謝のうちを送らせていただいで居りますことを御報告申し上げます。皆様の上に、神様の豊かなお恵みがありますようにお祈りします。



米寿の感謝会に出席して

森 田 清 恵

いつも若々しい榎本利三郎先生が、驚いたことに米寿のお年かぞえ年で八十八歳になられたのです。その上、信者主催ではなく、先生が神様に感謝する会を催されるとのこと。平成八年四月二十八日は、先生のお誕生日で日曜日、珍しいのと、何だか楽しそうなので、私も（今年の一月に入会したばかりだけれど）出席させていただきました。

出席者の間をマイクが廻って、沢山の方々が、次々と話されました。いつも問題を抱えて先生を訪れると、茶の間に温かく迎え入れて聴いて下さり、相談に乗り、祈って下さると不思議に解決したという、長年にわたる先生の牧会の軌跡を、笑いと涙で沢山聞かせて下さいました。「これこからもいつまでもお元気で牧会して下さい。」と、いわれるたびに、先生は、「それは神様におっしゃって下さい」と、笑顔でおっしゃいます。先生が元気で長生きなさっている秘密を、正野兄姉が、今、ベストセラ―の本、「脳内革命」（春山茂樹著 サンマーク出版）を引用して説明されました。何でも、人間の脳からは、善玉ホルモンと悪玉ホルモンが出ているそうです。怒り、憎しみ等、不

快な気分は悪玉ホルモンを出し、健康に有害です。反対に、喜び、楽しみ、感謝する等、すべてをプラス発想でとらえ、前向きに生きると、善玉ホルモン即ち、脳内モルヒネが発生して、病気を治す働きをするそうです。この著者はクリスチャンではないかと思われるくらい、クリスチャンの生活がいかに体に良いかがよくわかる。牧師ご夫妻の今日あるのは、この本が言う脳内モルヒネの働きによるものと思われる。本には、人間は百二十五歳まで生きられると書いてあるので、先生もまだまだ長生きされるでしょう。」とのお話でした。今日はとても恵まれた、楽しく、すてきな一日でした。私は、前田教会がどんな教会か知らずに、ただ近くで通い易いというだけで、病気の予後、小倉から転入させていただいたのに、聖書信仰にすっかり立つ、すばらしく恵まれた教会とわかりました。こんなすばらしい教会に私を導いて下さった神様に、深く感謝した一日でした。そして、ご用意いただいたサンドイッチ、ご息から送られたというフルーツキャンデーなど、おいしく、天国で主と共に囲める食卓も、このように和やかかかもしれないと、クリスチャンだからこそ抱ける希望に、これまた感謝しました。

親子ローン

久保田 宮子

この度思いがけなく娘には良すぎる高級マンションを手に入れる事が出来ました。嬉しくて事の成り行きを書く事にしました。

毎日新聞社と言う良き職場には居るのですが、給料があまりよくなくて四十三歳まで独身(自分にきびしい性格)、この子の事は一日も頭から離れず、結婚資金も随分たまりました。

丁度、兄弟で話をして居るのを耳にしたところ、「来春から車庫代が上がるので困った!!」。我が家には車庫があるので近くに住むと良いがと、常々何とか持家をとパンフレットが入る度に主人に見せて居ましたが、然々相手にしてくれず悲しい思いをして居ましたが、この度神様の働きにより我が家のすぐ近くで、その上、六年前から妹が住んでいるマンションに入居出来る様になったのです。

神を知らない人はタイミングが良かったと一言で片付けますが、私は神が生きて働いて下さったとしか思われませんが、

その上、買入なされた方の事情で入居しておらず、全くの新築には又びっくりです。でも中古物件になるので住宅金融公庫

が少ししか出ないので、私と娘はあきらめて居ましたが、主人がとても気に入って親子ローンを組んでくれました。

三人の子供が実家の近くに住むと言う事は、喜びと共に心配も多くなると思いますが、又私の祈りの課題として進んで行く覚悟です。

ちょっと横道になりますが娘の考えを少し書きます。

家の話をした時、第一声が「兄に申し分けないし、私にはお金がないから断って」でした。

内輪の事を書きますが、十年前に東京より長男夫婦が「親の老後を見る」と言って帰って来ました。その際独立して見ようと言って新聞社のすぐ近くに古いマンションを借りて生活していたのです。

この事を嫁に話したら「規子さんは大きな勘違いをしている。私共としては近くに住む方が安心、大いに喜ばしい」と言ってくれました。涙が出る程嬉しう御在居ました。

又すでに住んでいる末の子も「姉と近くに住む事は嬉しい」と言ってくれました。この事を娘に話しても「親に面倒を掛けるのは心配だ」と言って反対していましたが、上司の方が「親にあまえる事も親孝行」と言ってくれて決心した様です。

時は神のみ知る事ですが、順番に行けば私共二人は召されませんが、近くに住む三人の子供が力を合わせて神に従って行く事

を望まずには居られません。

又、孫のお陰で我が子になき喜びを味わっています。何でも話を聞いてやれるおばあちゃんにならねばと、今私は一番幸せです。

今後色々問題があると思いますが、その都度祈り通して参りますので良き知恵をあたえて下さい。

牧師先生始め信者の皆様、宜しくお願い致します。

以上



祈りを聞いたもうものよ

「Y」

◆よい事を行いますか? ————と言っても、やはり本当にうれしい事でした。と言っても、やはりすばらしいことが行ってしまうのですよ。少し、いろいろの事を行っても、やはりすばらしい事を行う、と言う事になってしまうのです。

◆さて、少しきびしい事があったかも知れないけど、やっぱり、美しい事になってしまふのですよ。本当に、本当にと言うと、言う事もやっぱりすばらしい事になるのですよ。

◆さて、いろいろの事を行ってよかったのです。まず礼拝を行います。すべて感謝、感謝でした。ありがとうと言う事でした。何かほかの事があっても、いろいろ行ったり、いたします。

◆でも、少し何か行うことがあつたら———いろいろの事を行ってしまうかも知れません。あれも感謝でしたでしょうか?

◆あの事も———それから出来なかったことも、感謝、感謝と言ったって、———また他の事を行ったら、何を言おうかと言ってしまうのです。

◆でも、やっぱりいろいろの事を行ってしまいましたよ。やっぱりすばらしい者でした。

◆さて、もう少し、行う事があったのです。まず行う事、そして、色々の事をすべて感謝するのです。

◆でも、何か行つてすばらしい事を行つても、またきびしい事を言われるかも知れません。でも、やっぱり、行つてすばらしい事を祈るのです。

◆だって、祈っていたって、すばらしい事を行つてしまうのです。これは本当にいろいろの事を行つてしまうのです。だから、また、すべての事を行つて、また感謝、感謝となるわけです。

◆何かある事があるかも知れません。でもやっぱりすばらしい事を行つたり、また礼拝を行つたり、いろいろの事を礼拝としてお祈りをいたします。

◆だから、そう言う事を行つて立派な事を行うのでしょうか。それとも、他の事をすばらしく行うのでしょうか。

◆さて、ひとつ、あの先生がまず行つて下さいます。あの時、いろいろ行つてしまつて、とてもよかったです——ひとつ、どなたか祈つて下さるでしょうか？

◆やっぱり、美しい事でした。あの方も、他の方も、美しいと言う事も、やっぱりすばらしい事もありました。

◆私も、ギブスが退院する事もあったのですね。本当に美しい事を行ったことも、あったでしょう。でもよかったですね。やっぱり嬉しい事でしたよ。

◆でも、お祈りと言う事になつても、祈りも出来ないし、と言つて、やはり美しい事を行えば、良いのですね。美しい事、すばらしい事と言つても、やはり美しい事を言うのでしょうか。でも出来る事があるのでしょうか。すばらしいと思つても、やはり祈つてしまうのではないのでしょうか。すばらしい事、感謝でしょうか。

◆さて、私も、あの先生の所に行つてまいります。本当にすばしくなつていたのですが、祈つていますよ。ありがとうございます。以上



朝の情景

正野 悠子

「お弁当を早く、遅れるよ」と、朝の七時二十八分、高校三年の次女は大あわてで、玄関を飛び出して行きました。一人送りだし、ホッとしたと思うと、短大生の長女が起きてきて、洗面所を占領、身仕度をはじめました。中学三年の長男は悠々と新聞と好きな本を見ながら、朝食をとっています。七時五十分、その彼もいそいそと登校してゆきます。長女は一時間後の出発なので、のんびりとお洒落をして、九時前に自転車で学校へと向かいます。主人は目下単身赴任中で、土日のみの帰宅です。熊本の地で励んでくれています。

長女を玄関に見送った時は、神様に心から感謝を捧げます。「今日も家族の者が、各々、良き持ち場立場を与えられ、元気に励みゆかせていただき、ありがとうございます。私も今日も健康を与えられて、皆を見送る御用を終わらせていただいて、ありがとうございます」と。

それから、洗濯機をかけながら、一人で朝食をいただきます。これがわが家の昨今（平成七年九月）の朝の情景です。思い返しますと、私どもが福岡へ導かれたのは、十七年前の八月二十

五日でした。その夏は濁水で、北九州市内も時間給水がはじまっていた。暑い日でした。主人の仕事の都合で急に転居することになり、朝早くから、前田教会の榎本先生ご夫妻や、伊規須先生、野村先生、高木兄姉、林兄姉、兄夫妻が手伝って下さり、乳飲み子を抱えた私は何もしままで、午前中に主人と荷物は福岡へ向かいました。すぐ後に、二才五ヵ月になった長女の手を引き、生後六ヵ月の次女を抱えて、列車で私も出発したのです。出かける際は、榎本先生がお祈りくださいます、同席の兄姉が心を合わせて下さり、送りだして下さいました。胸が詰まって、よくお礼の言葉も言えませんでした。一杯でした。これが私の二十年間住み慣れた八幡からの旅立ちの日でした。遠賀川の鉄橋を渡る車窓を見ながら、淋しさと旅立ちへの不安を思い、涙したことを昨日のことのように思い出します。

経済的にも、一ヵ月の家賃と生活費のみでのスタートでした。転居先は主人の新しい勤め先に近いアパートの一室で、大濠公園教会（榎本先生が兼牧中でした）に行くには、電停もバス停も近く、便利の良い所でした。不思議なことに、そのアパートの玄関の前には、市内屈指の名医と評判の小児科医院がありまして、その地区は常時水も与えられていました。私どもの考えの及ばないところまで、神様の愛のご配慮をいただき感謝いた

しました。

それからの日々、主人は新しい仕事で、私は子育てで共に祈り合いつつ、ひたすら主に依りすがって励みました。五ヵ月後、次女は生死をさまようような「はしか」に罹り、全快まで一ヵ月を要しました。入院しなければならぬ状態でしたが、小児科医院が前にお陰で、絶えずその先生のアドバイスと治療を受けながら、最後まで自宅療養で守られたのです。その一ヵ月後に、やはり次女にヘルニヤがおこって、近くの外科で、私は長女もつれて入院、手術を受けさせました。それから弱かった次女も、日毎に元気になっていただきました。

こちらでは、大濠公園教会で魂のおやしないをいただくことが許され、親子四人で礼拝に、火曜会にと出席させていただきました。教会には前田から、聖言に慰められ、励まされてまいりました。教会には前田から、安東兄姉ご一家が移って来られていたので、ご迷惑をかけるばかりの私でもでしたのに、よく助けていただきました。又、教会の皆さんも愛をもって、私どもをお受け入れ下さり、お支え下さいました。主にあるがゆえにと、心から感謝しております。

その後、昭和五十五年には、近くの産婦人科医からは、高齢で三回目の帝王切開による出産は危険、と断られました。が、神様は元氣な男の子を与えて下さり、中学三年の今日まで、遅しく成長させて頂きました。

この十七年間の旅路は、イスラエルの民の荒野の四十年と同じように、民にとって戦いの連続であるだけに、神と共にある最高の年月であったと同様に、神様に依りすがらずにはひと時も立つことのできない、幸いな恵みに満たされた歳月でした。この間、幾度となく、神様の前に不平を言い、つぶやき、ご愛を疑ってさまよい出た私どもでしたのに、神様は黙ってお守りくださいました。唯々、イエス様の御犠牲のゆえに許されて、私ども五人の者は今日を迎えさせていただいております。

この朝の情景は、今までもそうであったように、年月と共に移り変わって行くでしょう。その生かされる日々の中で、五人の者が各人、神様のご愛に少しでもお答えすることができましようにと、切に祈りつづけております。

「あなたの神、主がこの四十年の間、荒野であなたを導かれたそのすべての道を覚えなければならぬ。それはあなたが苦しめて、あなたを試み、あなたの心のうちを知り、あなたがその命令を守るか、どうかを知るためであった。それで主はあなたを苦しめ、あなたを飢えさせ、あなたも知らず、あなたの先祖たちも知らなかったマナをもって、あなたを養われた。人はパンだけでは生きず、人は主の口から出るすべてのことばによって生きることをあなたに知らせるためであった。この四十年の間、あなたの着物はすり切れず、あなたの足は、はれなかった。」

(申命記八・二一四)

A Nameless View

My Little Friend

普段なにげなくくらして居る僕らにも

なんとなくある好きな景色

つらさや痛みを小さな心にいつぱいつめ込んで持って行けば

何か忘れていた大切なものと取り換えてくれるようなそんな景色

だれにもゆずれない人がいるように

だれにもゆずれない景色

人には言えないけど僕らみんな持つてる

ショーウィンドーに並ぶような高価なものじゃなくても

つぶれた空き缶のように名前もつけられないような

それでいて心をなごませる

名もない景色

A Nameless View

H 8・2・3

敬老の日を迎えて

上野 米子

御聖名を崇めて感謝致します。

今年もまた九月十五日敬老の日を迎えました。私は「その日その日」にこのようなことを書き留めました。この日は戦後、祝いの日として祝日に組み入れられました。今日のご老年の方々は、第2次世界大戦という国難に処して、敗戦後五十年という長き歳月を、生きて来られた方々です。

焦土と化した日本の新しき小さな芽を心に託して、国民総決起して往き働きして、今日の繁栄を見るようになりました。当時のその方々も弱きを覚え、老いの重荷を負うようになりました。そして国家はその方々に敬老という名の祝日を設けて感謝の日となりました。

戦後は長年培われてきました日本の良き制度、思想も変わりました。「長幼序あり」という言葉も影が薄れ、敬語・礼儀も冷えつつある日常生活となり、家族の団欒、睦の姿もだんだん遠くなりました。古き時代に生きた私には、一抹の淋しさを覚えます。

でも幸いなるかな、「主」のお救いに与かりました私たちは、

お聖書を通して、主の御旨をたまわることができ、愛の交わりをいただいております。神様の御旨は何でしょうか。

「愛」です。神様は私たちの罪の為にあがないの供え物として、独り子なる「主」をこの世に下し給いて、ご愛を現してくださいました。そして、「ここに愛がある」と申されました。敬老という言葉はうれしゅうございますが、一日のみの敬老ではなく、平素の生活の中に、魂を敬老という衣で包み、主のご愛を覚えて、答えまつることができましように祈られました。人の愛は変わりますが、主のご愛は変わりません。「イエス・キリストは、きのうも、きょうも、いつまでも変わることがない。」（ヘブル一三・八）との聖言をいただいております。感謝です。

「その日その日」より

心あけ 語る人なし 老いの道

その日その日を ペンに託して

平成七年九月

黙想（雨）

上野 米子

しのびよる雨足、時々交えて聞こえてくる大きな雨の音、一雨毎に冬を運ぶ雨、木枯らし一号が吹いて間もなく立冬を迎えました。冬期は降雨量が少ないとか、してみれば今朝の雨は恵みの雨です。私は床の中で思いました。最近とみに体力の衰えを覚え、主は何時私を御国に召してくださいのかしらと、時を持ち給う主に語りかけました。「目をさまして、感謝のうちに祈り、ひたすら祈り続けなさい。」（コロサイ四・一二）の聖言をいただきました。老いると言うことは滅することではなく、人の成長としての一節であると語られてありました。そして、死と言うことも神様からいただいた命を造り主なる神様にお返しすることであると申されてありました。若き頃は家事に、子供の成育にと多忙な日々を繰り返して居りましたが、老いの期を迎え静かな時を備えていただき、ものをみつめ、ものを深く思わしめていただきほんとうに感謝です。「わたしは常に主をわたしの前に置く。主がわたしの右にいますゆえ、わたしは動かされることはない。このゆえに、わたしの心は楽しみ、わたしの魂は喜ぶ。わたしの身もまた安らかである。」

(詩篇一六・八一九)

ほんとうに主が共に居まして主と共に歩む生活は、力とよろこびと平安の生活であることを覚え感謝でございます。ハッと我に返り、孫の登校する自転車の音を耳にし、ぱっとベットを離れ、遠き道を行く白い雨合羽を身につけた後ろ姿に「神様、どうぞ御一緒してお守り下さい」とお祈り申し上げました。私たちの生涯は祈りの生活であり、「ひたすら祈りつづけよ」と申されました主をいただき感謝申し上げます。

平成七年十一月十三日



新生児のための命名参考資料

伊規須 太郎

△考え方

- ◆生まれた年を記念するため、その年の(新年聖会)標語(の文字あるいは意味)から文字を頂くこと。
- ◆二十世紀末を記念する文字を読み込むこと。いつの日か「うちのおばあちゃんは二十世紀末の生まれだって」と言われるでしょう。
- ◆親子にとって生涯の拠り所となる聖言を頂くこと。

△文字

- ◆彼女は一九九五年末の誕生であり、数日で一九九六年となりました。そこで、兩年の教会標語の鍵は
- a 九五年は……………「時」
- b 九六年は……………「見」るです
- c 世紀末のいま闇の中から「光」を待つべき時であり
- d 地の果てからの救を「仰」ぎ
- e 「望」むべき時です
- f 福音の目的は裁きの日に「清」く
- g 「正」しく仕えさせること
- h (文語訳)では「聖」と

i

「義」もて懼なく事へしむ

あなたの声を聞かせなさい

大田 邦子

△参照△

◆各文字については、次の聖書箇所を参照して下さい。

- a 「時」―エペソ人への手紙 五章一六節
- b 「見」―エレミヤ書 一章一一節
- c 「光」―イザヤ書 九章二節
- d 「仰」―イザヤ書 四五章二二節
- e 「望」―イザヤ書 四五章二二節
- f 「清」―ルカ福音書 一章七五節
- g 「正」―ルカ福音書 一章七五節
- h 「聖」―ルカ福音書 一章七五節
- i 「義」―ルカ福音書 一章七五節

△命名△

◆お母さんのお名前から一字をとり「美」

前記のcから「光」へんの「輝」をとり

「美輝」(みき)さんと名付けられました。

△家族△

父……………畠山 義信兄

母……………畠山美栄子姉

長女……………畠山 美輝さん(一九九五年十二月二十七日誕生)

以上(戸畑教会)

「大田さん、旅行記を書いて下さい」

「エッ!」

一瞬声が詰まりました。これは二十年前、都城の丸山様宅の新築感謝会に、エステル会の旅行を兼ね、高千穂、霧島、えびの高原とお世話になり、素晴らしい旅をさせて頂き、感謝で一杯、興奮未ださめやらぬ時、先生からのお声。

即「書けません」と断りたかったのですが、間髪入れず、「まず従いなさい」とイエス様、常に祈りの中で、「み旨にお従い出来ます様に……」と祈ってます。仕方なしに、もうどうなるかわかりませんが「ハイ」とご返事、歯切れの悪い返事だったと思います。

もう、旅の余韻もあったものではなく、さあ大変、帰りの頭の中は困った困ったの堂々巡り、勿論記録もっていません。何をどう書いてよいのやら……。

苦手の数々

実は文章作りは全くの苦手、学校で嫌いな科目は国語、その中で苦手の最たるものが、小学校時代の綴り方、女学校時代の

作文、ですから手紙は書かない、筆不精の私でした。

もう一つ大きな苦手は人前で話すこと、教会に近づけられてから集会でお証しがあります。感謝の気持ちはあっても、出来るだけ逃げておりました。でも感謝の恵みが一杯で、神様から押し出される様に口を開くものの、唇は震え、思うことは話せず、つじつまの合わない何だかわからなくなって、もういい……と、しりきれとんぼで終わる始末です。

榎本先生が懇ろにとりなして、足りない処を補って終りをきちんとして下さいます。感謝でしたが、そんな夜はお風呂につかっている、思い出してはポーンと赤くなる。床についても、失敗が頭の中を行き巡り寝つけない。自意識過剰もいっこ。素直にお証しされる方、ぶどうの木にも、すんなりと投稿していらっしゃる方が本当に羨ましい限りでした。

悪戦苦闘

榎本先生は、主の恵みを忘れない為に書き留めることが……とおっしゃいますが、書いてその残ることがイヤなのです。

投稿となると、人を意識します。書きとめることはいいことと判っていても、うまく纏められない、恥ずかしい……等、こんな私が旅行記を書くなんて……、神様から離れては何も出来ない者が、自分の力で書こうと思いがあって自分目ざまり、

申し訳ありませんでした、と悔い改め、どうか書く力を与えて下さい、感謝の旅をもう一度思い起こさせて下さい、知恵を与えて下さいと切に祈りました。

文章にならなければ、喋り言葉でいいじゃないか、やっと観念、力を抜いてペンをとりました。

この旅行記を旅の前か途中にでも言われていたら、重荷になり、もう心底から楽しむことの出来ない旅になっていたのではないかと思うと感謝で一杯でした。

悪戦苦闘の末、さだかでない所は姉妹方にお尋ねし、助けられ、提出させて頂きました。

いよいよぶどうの木が発行され、礼拝の受付で頂きました。すぐに自分の所を開く勇氣がありません。とぼして、榎本先生はじめ皆様のを読ませて頂くことです。

この旅にご一緒でした、今は亡き高木先生が、早速、

「大田さん、よく書かれましたね、メモしておられたのですか……」と声をかけられ、もう恥ずかしいやら、でもちょっぴり嬉しいやら、励まされました。それから、そっーと自分のを読む有様です。

そんな自信のない私を神様はあわれんで強めて下さいました。この旅行記を書くことで、お従いすること、力を与えられ書かせて頂いたこと、主を知らせて頂いた大きな恵みの訓練の場で

した。勇氣もいりました。それだけにその時のことが、とても懐かしく、今もはっきりと蘇って来ます。

あなたの声を聞かせなさい

今でも、書くこと、話すことは苦手です。避けられるものなら避けたいのです。でも主は、すべてに弱く何一つ出来ない私を知り尽くされた上で、愛するが故にと、肉の思いでは苦しいこと、悲しいことがありましたが、あわれんで次々と奇しきみ業をもって、恵み育んで下さいました。

主の栄光も見せて頂きました。

神の恵みをいたずらに受けてはならない……

今は恵みの時、見よ、今は救の日である。

(Ⅱコリント六・一一二)

愛されている者として、この数々の恵みを真剣に受け止めさせて頂き、神様は何を求めておられるだろうか、何を喜ばれるだろうか……、「あなたの声を聞かせなさい……」とおっしゃる主に、へりくだって感謝を捧げようと、心も新たに踏み出します。

いざ書かせて頂こうとペンを取ると、この恵みを……、この感謝を……、この感動を……、どう表現してよいのか、言い表

せないもどかしさ、言葉は出てこない、日頃何げなく使っている言葉も、書くとなると難しい、やっと言葉を見つけたと思うと、今度は同じ言葉の羅列になる。又気が重くなります。

あの旅行記も、神様に書かせて頂いたのではないか、ありのまま出なさい。主を前において祈らせて頂く。

神のあかしを宣べ伝えるのに、すぐれた言葉や知恵を用い
なかつた……。(Ⅰコリント一・一)

強められてペンを運びます。行き詰まっては少し離れる、又ペンを取るの繰り返しです。下手な長文となり、時間ばかりかかり、何時も締切に間に合わない劣等生です。

いまは知らず、後に悟るべし

書くことの嫌いな私ですが、これも貴重な神様との対話の時、お交わりの幸いな時として頂きました。以前は書いたものが残るのがいやでしたが、今は素直に書きとめることで、恵みも新たに、多くのことを教えられております。

* 聖言が心にとどまる様になりました。

* 水をぶどう酒に変えられた主に、ふれさせて頂きました。

水をくんだ僕たちは知っていた。

(ヨハネ二・九)

* 私の信仰の曖昧さを思い知らされ、渴きをもって祈り求めて、み声を聞かせて頂けます。祈りが応えられた時は、たとえ様

のない喜びです。

*神様のご計画の素晴らしさ。

わたしのしていることは今あなたにはわからないが、あとでわかるようになるだろう。
(ヨハネ二三・七)

一つ一つが備えとならしめて頂き、主の恵みによって強められ導かれていることを……。

主は言われる、わたしがあなたがたに対していている計画はわたしが知っている。それは災を与えようというのではなく、平安を与えようとするものであり、あなたがたに将来を与え、希望を与えようとするものである。

(エレミヤ 二九・一一)

主のご愛に生かされ、愛するが故にと懇ろなお取扱いに心からの感謝と讚美をもって、お証しとさせて頂きます。



編集後記

◎主の恵みふかきことを味わい知れ、主に寄り頼む人はさいわいである。 (しへん三四・八)

◎ただ、味わうだけでなく、それを記録に残すことによって、その恵み深さを知らせて頂くことができます。

◎そして、その記録のそこかしこに、主に寄り頼むことのいかに幸いであるかが確かに見えてきます。

◎「ぶどうの木」第二十三号をお届けします。